王子と魔女

祥鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王子と魔女

【Ｎコード】
Ｎ０１７０Ｆ

【作者名】
祥鈴

【あらすじ】
ステノブルクの第二王子・ウィリアムは、赤い糸ならぬ、赤いリボンに導かれ、魔術師・アマーリエと出会う。アマーリエはウィリアムの護衛になり、二人は徐々に惹かれあうが……？

1．出会い

ウィリアムは、体の上を何かが這うような感触で目を覚ました。
左腕を持ち上げると、そこには、紐が巻き付いていた。紐、いや、リボンだ。それは、ゆっくりと、手首から腕へと、登ってゆく。するすると、まるで自分の意志があるかのように振る舞うそれを、ウィリアムは呆然と眺めた。
「なんだ、これ」
つぶやいてから、リボンの端を掴むと、それは力を失い、あっけなく腕から離れた。リボンの行く先を目で追うと、どうやら、窓の外へと続いているらしい。
月明かりに照らされたリボンは、赤色をしていた。運命の恋人を結ぶという、かの有名な赤い糸も、きっとこんな色をしているに違いない。そう、万人に思わせる色だ。……リボンだけど。
「気味が悪いな」
そう言いながらも、好奇心の方が、警戒心に勝っていた。
ウィリアムはリボンの端を握りしめたまま、バルコニーに出た。冷たい夜風が、彼の髪を揺らし、リボンを舞い上がらせた。
リボンの出所を求めて、空を見上げると、そこには、一人の少女がいた。
銀の髪に、すみれ色の瞳。精霊か何かのように、美しい。道ですれ違う人を、思わず振り返らせる、印象的な顔立ち。
普通の出会いなら、ウィリアムもしばらく見とれていただろう。しかし、目の前の光景は、魔力を持たない彼にとって、あり得ないものだ。
三日月の形の、未確認飛行物体に乗って、婉然と微笑む美少女。それが、リボンのもう一端を左腕に巻き付けている。
見なかったことにして、もう一度眠ろう。そう思って、引き返そうとしたとき、少女の口が開いた。

「貴方が、私の運命のヒトなのかしら」
「は？」
ウィリアムは思わず聞き返した。運命のヒトって……案外夢見がちなんだ、と一瞬思った。しかし、これで引き返すタイミングを失ってしまった。こんな、あり得ないことをして、意味不明なことを言う人間と関わって、ろくな事が起こるはずもないのに。
「まぁ、いいわ。ところで、貴方、私を一体なんだと思っているのかしら」
少しむっとしたような顔で言われ、ウィリアムは少し考えた。魔術と魔法の区別はよく知らないが、空を飛ぶのは、魔法使いだろう。魔術師は飛ばないような気がする。魔法使いの女性版というと……
「魔女」
と答えた瞬間に、顔面すれすれを、氷のつぶてが飛んでいった。頬に傷ができたから、かすったのかもしれない。
「失礼ね！　訂正なさい！」
怒っている。それだけはわかった。しかし、こっちは相手のことを知らない。上空まで範囲にはいるのかは知らないが、彼女はれっきとした不法侵入だ。兵士に突き出さないだけ、ましだろう。
「訂正って言っても、俺は、あんたのこと知らないんだけど」
「知らないですって？　私は貴方に一度会ったわよ、ウィリアム・デゥオ・ステノブルク」
会った事無いなんて、言わせない。
と言われても、思い出せないものは仕方がない。相手はフルネームで知っているようだが、生憎、人の名前だけは一回で覚えられない。
「俺は知らん。名前を覚えるのも苦手だ。というか、名前くらい名乗れ」
そう返すと、彼女はやれやれ、とため息をついた。
「もう、いいわ。どうせ後で会うことになるから、その時名乗るわよ。どうせ、覚えてもらえないんでしょう？」

彼女はがっかりした様子で、手をひらひらと振った。
「こんなのが運命のヒトだなんて、ついてないわ。あぁ、言い忘れるところだったじゃない。私は、魔女じゃなくって、魔術師だから。もう一度魔女なんて言ったら、今度は殺してやるから、せいぜい気を付けなさい」
そう言うなり、彼女は消えた。握っていたはずの、赤いリボンも消えていた。空に残っているのは、満月と、満天の星空だけ。
「何だったんだ？」
今晩は、もう、眠れないかもしれない。ウィリアムはそう思った。

1．出会い（後書き）

初めまして、祥鈴と申します。
読んでくださって、ありがとうございます。
更新スピードは遅いと思いますが、気長に見守ってもらえると嬉しいです。
文章におかしいところがあったら、ご指摘、お願いします。

2．日常？

ウィリアムは、目の前の大量の書類を片付けながら、一週間前の出来事を思い出す。

強い意志を持った、すみれ色の瞳。夜風にたなびく、銀糸の髪。そして、赤いリボン。

早く忘れてしまいたいのに、何故か、気にかかって仕方がない。

「……ル、ウィリアム。大丈夫か」

ん？と顔を上げると、友人のルーカスが、心配そうに覗き込んでいた。

「何考えてんだ？　一応、親友のつもりだし、聞いてやってもいいぜ」

ウィリアムは、しばらくルーカスの顔を眺めた。二股、三股は当たり前な男に、相談？　ちらっと見た女の子が忘れられません、って？　笑われて終わりだ。

「いい。ルーに相談しても、仕方ない」

「仕方ないってどういう事だよ。ウィル、酷くない？　俺、心配してるんだよ？」

「それはありがとう。でも、その前に、自分の行動を反省したら？」

ウィリアムは軽く頭を振って、少女の面影を振り払い、書類に集中しようとした。

「行動を反省？　なんかしたっけ、俺。あぁ、そうだ。言うの忘れてた。俺、結婚するんだ」

その言葉に驚き、顔を上げる。

「結婚？　誰と？」

というか、その前に、特定の一人とつきあっていたのか、こいつ。そりゃ、２３歳だから、おかしくはないけれど。

「ローゼリアって言うんだ。綺麗だぞ」
「……誰」
「え、マーヴェルに行った時に、会わなかったっけ？」
「マーヴェルって、剣術大会の時？」
この国、ステノブルクの北に位置する大国、それが、マーヴェル皇国だ。四年に一度、武術大会が開かれ、その中には剣術部門もある。三年前、嫌々連れて行かれ、うっかり準優勝した覚えがある。
……逆に言うと、それしか思い出せない。
「そうだよ。お前、準優勝だったよな。それで、皇女様から、花冠もらっただろ。優勝した奴がとっとと帰ったから。その、皇女様のお付きの人」
ウィリアムは動きを止めた。花冠など、もらっただろうか。決勝戦で戦った相手のことばかり気にしていた気がするのだけれど。
「その、皇女様の顔も覚えてない。でも、どうせ、結婚式の時に紹介してくれるんだろ？」
笑いながら言うと、ルーカスは、どこか遠いところを見つめた。
「すまん。それは無理だ。式はマーヴェルで挙げるって、向こうの親御さんと約束したんだ。だから、明日からしばらく、休暇を取ってたりとか、はは」
ルーカスはそう言って、乾いた笑みを浮かべた。
「上司の許可も取らずに、勝手に休暇取るなよ」
一応、ルーカスはウィリアムの補佐官だ。普通は、事前に報告くらいあっても良さそうなものだが。
「陛下にお許しはもらった。今日、お前の護衛が来るそうだから、その後なら自由にしていいよ、って言われたし、仕事はそいつに任せていいらしいし」
「任せるって、来たばっかりの奴に？」
無理だろう。好きこのんでこんな仕事をしているわけではないが、結構、軍の機密情報が流れてくる。その上、ウィリアムが実戦よりも書類仕事を好むので、兵士に直接指示を出したりするのは、ルー

カス任せなのだ。
「数ヶ月後には、絶対戦争が起きるから、慣れとけってことじゃないか？　いや、俺も、陛下の考えはよくわからないんだが。最悪、ウィルが全部すりゃいいし？」
「全部って……」
呆然とするウィリアムを、ルーカスは、力づけるように叩いた。
「大丈夫。本を読むのを我慢すれば、何とかなるさ。書類だって、本当にお前が決算しなきゃならんのは少ないだろ。王子だから優遇されてるだけで、普通だったらまだ下士官だろ。たまには人に頼ればいいじゃん」
「まぁ、そうだけど。……そう言えれば、護衛って？　俺、そんなモノいらないと思うんだけど」
「あぁ。俺も知らないんだよな。お前、剣なんて嫌いだ、って言う割に強いし、護衛を付けるなら寧ろ、リチャード殿下だよな」
「そうだよなぁ。兄上の方が危険だと思うんだけど」
二人が首をかしげた時、ドアがノックされた。

「ウィリアム殿下。陛下がお呼びです」

護衛、とやらが、やって来たらしかった。

3．南での事、その１（前書き）

アマーリエ視点になっています（次回もですが）
読み飛ばしてもらっても、一応つながります。時間的には、出会いのちょっと前になっています。

3．南での事、その1

アマーリエは大きな欠伸をかみ殺した。
眠い、帰りたい、ベッドに倒れ込みたい。
それしか思い浮かばない。教師の話など、子守歌のよう。

この惑星には、四つの大陸があります。世界樹の生えている、神の島・クレタを中心にして、東西南北に四つ。東西南北の順に、グランシア、アールシリア、エル……

「相変わらず、下手な絵」
アマーリエがぼそりとつぶやくと、教師がにらみつけてきた。
「何ですか、実習生。次の授業は、貴女がするのですよ」
「でも、そんな絵を描くくらいなら、地図を持ってきた方がよいのでは」
黒板には、小さな丸と、それを取り囲む、四つの大きな丸が描いてあった。省略しすぎて、何なのかわからない。ついでに言うと、字もかなり下手だ。
教師は、手に持っていたチョークを、折った。
「もういいです。貴女に教師は向いていません。教室から出ておゆきなさい！」
アマーリエは、しばらく突っ立っていた。しかし、抵抗らしき抵抗もなく、のろのろと教室を出て行く。風が、彼女の銀糸の髪をさらう。
「どうしようかしら……」
パートナーとやらを選んで、仕事をするか、一人でもできそうな職を探すか。十八になる前に、何らかの役割が得られなければ、国に返されてしまう。
母親と顔を合わせるくらいなら、どこかに土地をもらって、農民

に出もなった方がましだ。でも、母親は、決してそれを許さない。
「困ったなぁ。適当に手を抜いて、適当な人と組めばよかった。……高望みは禁物よね」
中庭のベンチに座り、ぼんやりと空を見上げる。一日中沈まない、二つ目の太陽が眩しかった。左腕に巻き付いている赤いリボンが、日光を遮るように、目元を覆った。
「もう、やっと見つけた」
かけられた声の方向に顔を向ける。リボンが、するすると元の位置に戻ってゆく。
「アマーリエ。命宮司様がお呼びよ。急いだ方がいいんじゃない？
その様子じゃ、またクビになったんでしょ」
「ジル……」
同室の少女は、そう言うと、重そうな荷物を抱えて走り去っていった。
アマーリエはゆっくりと立ち上がった。命宮司なら、何か仕事をくれるかもしれない。何たって、この組織、南の最高権力者なのだから。

「失礼します。マリーシア様」
声をかけて入ると、初老の女性が微笑んだ。
「もっと近くにいらっしゃい。今回は、貴女にお仕事があるの」
アマーリエは、背筋を伸ばした。命宮司が指名する仕事は、難易度が高いのだ。
「あの、私、パートナーを決めていないのですが」
二人組以上で、仕事をこなすこと。明文化はされていないらしいけど。でも、軽々しく破っていい規則でもないはずなのに。
「いいのよ。個人の方が都合がいいそうですから」
「何なんですか」
「護衛です。魔術師としてね。護衛対象は、魔力を持たない男性です。今なら断ってもかまいませんよ。貴女には、帰る場所がありま

すものね」
　アマーリエは唇を噛んだ。あんな場所、帰れる場所なんかじゃない。
「いいえ。やらせてください。私は、帰りたくなんて無いんです」
「そう。貴女の国の隣国だけど、よいのね」
「隣国……。ひょっとして、ウィリアム王子ですか？」
「あら、知っていたのね。じゃあ、丁度よかったわ。一週間後に来てほしいという話です。詳細はこれに。よろしい？」
　アマーリエは書類を受け取ると、部屋を出た。

「で、何の話だったの、アマーリエ」
　昼に、命宮司が呼んでいることを教えてくれた少女、ジルは、興味津々といった様子で、聞いてきた。
「仕事の話。護衛ですって。ところで、貴女、何読んでるのかしら」
　ジルは、本を持ち上げて、表紙を見せた。
「赤い糸のお話。体のどこかからでていて、引っ張るとショック死するんですって。面白そうでしょ」
「何それ。普通、恋人同士を云々でしょ？　まぁ、南（ここ）には、女性しかいないけど」
「そう？　小指がどうとか、っていうけど、見えないんだもの。そんなの、つまらなくない？　そういえば、アマーリエのリボンって、そういうのに使えるんじゃないの。勝手に動くし」「そんな馬鹿なことといわないで。……確かに、私も何で動くのかはよくわからないけれど」
　アマーリエは左腕のリボンをつまんだ。ある事件の後、体から離れなくなったリボン。不気味だけれど、これのおかげで、けがをしなくて済んだことは何度もある。ひょっとしたら、運命の恋人、とやらも導いてくれるかもしれない。
「なんだか、やってみたくなったじゃない。私、しばらく外に出るわね」

「そう？　門限までに帰ってきなさいよ、って、日が沈まないからないんだっけ」
「門限、って、何？」

4．南での事、その2

「えぇと、確か、これと、これと、あれ、だったかしら」
棚には、ずらりと瓶が並べられていた。瓶の中には、不気味な色をした粉が入っている。
アマーリエは、その中からいくつかの瓶を取り出し、器の中に、少しずつ入れていった。
「形成するには、三百五十四ページ……これね」
分厚い魔術書を広げ、ぶつぶつとつぶやく姿は、かなり異様だった。
「できたわ。初めてにしては、上出来じゃない」
自画自賛して、うんうん、と満足げに頷く。三日月形の、妙な物体ができあがっていた。
「後は、空を飛ぶようにして完成ね。はぁ、面倒だわ。早く、空間転移用の魔術が考案されればいいんだけど。風の精霊王は、契約なんてしてくれないだろうし」
言いながら、その物体を引きずって、建物の外へ出る。その上に乗ると、白いバトンを取り出した。杖の一種で、元々は背の高さより長いものだったが、邪魔だったので、魔術で縮めたものだ。
「羽のように飛べ、私を乗せて」
呪文なんて必要ないとは思ったが、自分の中のイメージを固めるため、適当に何か言ってみる。リボンが伸びて、建物の端に巻き付き、物体ごとアマーリエを持ち上げた。そして、その物体は空を飛び始めると、リボンは腕に戻ってくる。
「便利、何だけどねぇ」
小さくため息をついてから、そのリボンの巻き付く左腕を前方につきだした。
「さぁ、私の“運命のヒト”の所まで、案内しなさい」
三日月形の謎の物体は、恐ろしい速さで、飛び始めた。

「羽って、言った、のに……」
それは、もちろん、羽じゃ舞うだけで、飛ばないでしょうけど。
軽く、乗り物酔いのような状態になったアマーリエは、速度を落とし始めた飛行物体に、安堵のため息を落とした。
「城が見えるわ。ここって、どこかしら」
南では一日中“昼”なので、わからないが、こちらでは夜ならしい。この星がどうやら球体ならしい、という話は信じてもいい。でも、太陽が二つあるなら、南半球はすべて、夜が無くなるような気がする。皆、お気楽にも、神様の配慮だとか言うけど。
「それだったら、北に昼がないわけ、ないじゃない。って、そんなこと言っている場合でもないわね。この城の形からして、東大陸(グランシア)であることは確かでしょうけど」
もっと、近付かなくては、国までは特定できない。アマーリエが自分の国にいた頃は、他の国に行く機会など無かったのだ。使われている言語や、文字で確認するしかない。
そんなことを考えている間にも、謎の飛行物体は城に近付いていた。

「A，sh……ステノブルクかしら、この文字を使っているってことは。このときばかりは、天人に感謝するわ。あの人達が勝手に文字を押しつけてなかったら、古代共通語を使っていたでしょうしね」
城の中庭に転がっていた木箱に書いてある文字を眺めながら言う。
ちなみに、天人とは、“チキュウ”から“降って”きた、はた迷惑な人々だ。いろんな言葉を押しつけて、“イデンシソウサ”とかして、挙げ句の果てに、“神なんかいない”と神を全否定。怒った神様に排除された、らしい。ただ、古文書なんて怪しいものだ。というか、そんな愉快な人が実在してたなら、もっと史実が残っていても良さそうなものだと、アマーリエは思った。
リボンはするすると解け、空へ舞い上がった。そして、開いた窓

から侵入してゆく。
「起こしたら悪いわね。光の精霊を呼び出して、透視しようかしら。でも、失敗しそうだし、どうしよう」
光属性、というより、その上位の炎属性の魔術が苦手なアマーリエはためらっていた。失敗したら、城中の人間を起こして、とんでもないことになりそうだ。
そんなことを思った時、バルコニーに人影が現れた。そして、目があった。
濃い金髪に、濃い翠の瞳。その顔には見覚えがある。昔、この手で花冠を授けたのだから。
アマーリエは微笑んだ。今の自分の姿は、多分、かなりの不審者だ。特に、魔力を持たない人間にとっては、それこそ化け物だろう。少なくとも、自分の母親は、そういう扱いをした。
「貴方が、私の、運命のヒトなのかしら」
そして、笑みを強める。
「は？」
彼は変な顔をした。それもそうだろう。いきなり、運命のヒト、ってねぇ。正直、アマーリエも同じ反応を返す気がしていた。
「まぁ、いいわ」
そう、こんな反応も、想定内。
「ところで、貴方、私を一体なんだと思っているのかしら」
彼は悩み出した。そして、あろうことか、魔女、と返したのだ。許し難し。
アマーリエは、ほとんど反射で、バトンを振り下ろした。先端から、氷のつぶてが飛び出す。それは、顔面直撃こそはしなかったようだが、かすったらしい。
それは、もちろん、こんな格好で来た私が悪いわ。でもね、本人の前で口に出しちゃいけないコトって、あるものなのよ。ホント、がっかり。
アマーリエは心の中で、そんなことを言った。しかも、しばらく

は彼の護衛をしなければならない。とても気が重くなった。
「こんな事なら、部屋で大人しくしてればよかったわ」
小さな声でつぶやく。彼には、聞こえなかったらしい。

4．南での事、その2（後書き）

これでやっと、元の時間に戻ります。
入れる場所を間違えたような気が……。
次回は、ウィリアム視点の予定です。

5．父と兄

「失礼します」
そう言って、ウィリアムが部屋に入るなり、分厚い本が飛んできた。
慌てて受け止め、顔を上げると、兄・リチャードが机の上に座っている。
「遅いよ。何分待たせる気なのかな、君は」
不気味な笑顔を浮かべたリチャードは、右手に持っているペンを、指揮をするかのように動かした。そろそろと、ペーパーナイフが独りでに動き出す。
ウィリアムは、口元を引きつらせながら、後ずさろうとした。実際には、ドアがあるので、それにへばりつく形だ。
「兄上。俺、一応知らせが来てから、すぐに来たんですけど」
リチャードは、そんなの信じられない、といった表情で、右手を振り上げた。
やばい、殺される。ウィリアムは本気でそう思った。
魔力さえあれば、止められたのだろうが、ウィリアムにはそれが全くない。
「兄弟喧嘩だったら、時間がある時にまたやりなさい」
ほけほけした雰囲気を漂わせた父親、もとい国王であるオーウェンが、空中に浮遊していて今にもウィリアムの元へ飛んでいきそうなナイフを掴んだ。
「それとも、殺したくなるほどのことがあったのかな、ナディア」
そんなことを言いながら、オーウェンはリチャードの肩を叩いた。
ちなみに、ナディア、というのは、リチャードのミドルネームだ。というよりも、リチャードが両性具有者だったので、慣例に従って、男女どちらもの名前が与えられたのだ。実際、子供の頃は王女として育てられていた。

「……もう、いいです」
リチャードはため息をつくと、ウィリアムを見た。
「聞いているとは思うが、そろそろベリルが動きそうだから、ウィルに護衛を付けることになった。父上のたってのご希望で、女性だ」
「だって、ウィリアムには、浮いた話が一つもないんだよ。二十歳過ぎた、成人男性として、どうなのかな、と思って。あはは、身元はしっかりしているから、手を出してもいいよ」
リチャードは舌打ちをした。忌々しげにオーウェンを見上げる。
「父上。静かにしていただくか、部屋から出ていただけませんか」
「は？　ここ、僕の部屋なんだけど」
「真面目に仕事をしない人間には権利を認めません。そもそも、縁談を片っ端から断ったのは、誰です」
「だって、ウィリアムが婿入りするとか言い出したら、寂しいだろ。下心見え見えの輩を近寄らせるのも、なんか嫌だし」
リチャードの口もとが引きつってきているのを見て、ウィリアムは恐ろしくなってきた。後でとばっちりが来るだろう。
「あの、ところで、護衛って何ですか。俺、一応、剣では負けないつもりです。寧ろ、必要なのは、兄上の方では」
二人は、ウィリアムの方をちらりと見ると、馬鹿だな、この子は、といった目を向けてきた。
「ナディアはいいんだよ。マティルダという、優秀な魔女がついているんだから」
「父上。妻は魔女ではありません。毒草に傾倒しているだけの薬師です」
「そうだっけ？　この前、自分で言ってたけど。でも、ウィリアムには魔力がないだろう」
ウィリアムは頷いた。
「ベリルは魔術を奨励していて、魔術師の数も多い。何か仕掛けてくるとしたら、魔術だよ。気が付いたら死んでましたなんて、僕は許せない。確かに、熟練した武闘家は、魔術師と対等に戦える。で

も、ウィリアム。君は本気で剣を握った事なんて、無いんだろう？」
「それは……」
ウィリアムは口ごもった。
「無いんだよ。見ていればわかるからね。護衛って言っても、がちがちに固めるつもりもないし。大人しく、言うことを聞きなさい」
「それで、誰なんです。その、護衛って」
ウィリアムが問うと、リチャードが書類を投げ渡した。
「アマーリエ・ローツェル。昼間は彼女に護衛してもらう。夜はそれを見ればいい。アマーリエ嬢は、もうそろそろ着くだろう」
「ちゃんと迎えに行くんだよ。アマーリエは、僕の友達の娘だから、怒らせないようにね」
ウィリアムは、促されて、部屋を出た。
友達の娘って、どうなんだろう？

「ちょっと、父上。やっぱり知り合いだったんじゃないんですか」
「やだなぁ。ナディアは会ったことあるでしょ。ウィリアムは知らないけど」
部屋に残った二人はまだしゃべっていた。
「……そんな名前の人、会ったことはありません。私は、人の名前は確実に覚えますよ」
「事情を察しなさい、リチャード。彼女がマーヴェルの生まれだと言えばわかるだろう」
すっと声音を変えたオーウェンに、リチャードははっとした。
「よく護衛なんてさせますね」
「本人達には内緒だけど、見合いも兼ねてるもん。あの二人が結婚してくれると、助かるんだけどなぁ。でも、無理かも」
オーウェンは、すっかり元の調子に戻って、やれやれとため息をつく。

「父上。どうでもいいですけど、もん、ってやめましょう？　なんか気持ち悪いです」
「そう？　そう言えれば、ハロルド、元気かな？」
オーウェンは背骨を鳴らしながら言った。
「ハロルドは、アマーリエ嬢の父親の偽名ですよね」
「だってさ、あいつ本名呼んでも、自分のことだと認知しないんだよ。仕方ないじゃん」
「そうですか。でも、彼と知り合いって、父上は本当に孤児なんですか」
リチャードはオーウェンを睨み付けた。オーウェンが孤児から王になったことは有名な話だ。
「本当だって。親の名前も知らないし、実際に孤児院の前に捨てられてたよ。ハロルドと会ったのは偶然。婿入りついでに、ちょこっとお手伝いしてもらっただけだって。でも、信じてくれないんだろうね」
オーウェンがリチャードの顔を覗き込むと、リチャードはぴしゃりと言いはなった。
「当然です。日頃の行いが悪すぎですから」

5．父と兄（後書き）

6. 護衛役

ウィリアムは、城の中庭に出た。花壇その他の手入れは、住人達が興味を示さないためか、おざなりになっている。まぁ、元の城主の趣味がよかったのか、一応見られる程度にはなっている。

「転移魔法、か。つまり、空から降ってくるのか？」

南からの術者は、転移系の魔術で大陸間を移動する。ただ、その魔術は開発途中で、一般に使うには危険すぎる魔術だ。中途半端な魔力の持ち主では、下半身置き去りとか、笑えないことが起こったりする。だから、南でも、一部の人間にしか使用許可が下りないらしい。

突然、強い風が吹いた。そして、目の前の風景が、ぐにゃりと曲がった。その違和感は、人の形になり、やがて、少女になった。

銀の髪にすみれ色の瞳。左腕には相変わらず、赤いリボンが巻き付いている。右腕には、身長よりも長い杖。白い棒が三本、三つ編みのように絡まっていて、上部には、三つの小さな青い石が埋め込まれている。地面に着く部分は、槍のようにとがっている。

「お久しぶり、ウィリアム」

彼女が口を開いた。

「それとも、殿下の方がよい？」

「いや。俺のことはウィルでいい、殿下って、なんか気持ち悪い」

「そう。私の名前、わかったかしら」

艶やかな笑みを浮かべて、彼女は言った。

「兄上は、アマーリエ・ローツェルと言っていたが」

「あら、そう。思い出してくれた訳じゃないのね。まぁ、いいわ。私のことも、アマーリエでいいわよ」

「……なんか、偉そうだな」

「別にいいでしょ。言葉遣いを変えたところで、何も変わらないでしょうし。要は、人前できちんとすればいいだけの事よ」

ウィリアムは、なんか違う、と思った。
「器用なんだな」
そう言ってやると、アマーリエは少し目を見開いた。
「このくらい、当然でしょ？」
微かに首が傾けられ、髪がさらさらとこぼれる。陽の光に当たって、淡い金髪のように見えた。穏やかな風が、髪をなびかせ、リボンをはためかせる。

自分の部屋に戻ると、騎士のアレンが退屈そうにして待っていた。
「どうかしたのか？」
「元帥から、言づてを……。あの、そちらの方は」
おずおずと、アマーリエを見る。機密情報の類で、部外者には聞かせられない、ということだろう。
アマーリエは、ワンピースの裾を少し持ち上げて、軽く首をかしげた。
「本日から、殿下付きの護衛となります。アマーリエ・ローツェルです。どうぞ、私のことはお気になさらずに」
「気にする、というか……」
アレンはすがるような視線をウィリアムに向けた。
「彼女は、俺の補佐も兼ねているそうだ。まぁ、気にしないでくれ」
何か文句を言いたそうだったが、結局アマーリエが席を外すことはなかった。

「あれってさ、マーヴェル皇国の、宮廷作法ってやつ？」
ウィリアムが言うと、アマーリエは首をかしげた。しばらくして、あぁ、といった。

「ちょっと、癖になっているのよね。次からは気を付けるわ」
「いや、いいけど。でも、南ではそんなことまで教えるのか？」
「依頼人に失礼にならない程度には、教えるみたいね。私は小さい頃から教え込まれたから、知らないんだけど」
　ウィリアムは眉を寄せた。マーヴェルでは、身分格差が激しく、平民はそんなことを身につけている余裕など無い。魔術を扱うことは好まれないし、貴族や裕福な商人は、魔力を発現させた人間を、衆目から隠し、南へ出すことすらさせない。
「どこの生まれなんだ？　父上は身元は確かだとか言っていたけど」
　アマーリエはまっすぐに、ウィリアムを見た。
「貴方が、私のことを思い出してくれたら、わかるわ」
「まぁ、いいけどさ。でも、俺が会ったことのあるアマーリエって、マーヴェルの“血の皇女（ブラッディ・プリンセス）”くらいだぞ。皇宮の奥深くに監禁されているらしいし、違うんだろ？」
「……」
　アマーリエが何も言わずに黙っているのを見て、ウィリアムは笑った。
「大体、俺、皇女様の顔って覚えてないんだよな」
「そう。彼女のこと、貴方はどう思っているのかしら」
「どうって？　でも、誘拐された場所で魔力を発現させて、誘拐犯を皆殺しにしたんだろ。監禁されっぱなしで、ろくな訓練も受けてないらしいし、ちょっと怖いかな」
「そう……。ところで、私の部屋ってどこなの。用意してくれるって聞いたけれど」
　心なしかアマーリエの声音が低くなっていたが、ウィリアムはそれには気付かず、頭に手をやった。
「それは俺も聞いてない。誰か女官を捕まえて聞いてくれ」
「わかったわ」
　そのままアマーリエは部屋を出て行った。
「紹介とか、そういうのは、明日でいいのか？」

ウィリアムはぼそりとつぶやいた。

6．護衛役（後書き）

ようやく、正式に二人を出会わせることができました。やっぱり、もっと細かく話の流れを決めておいた方がいいのかもしれません。

7．異能（前書き）

アマーリエと国王です。またもやウィリアムが出てきません。視点を固定するのは無理そうですね。時間は前の話から一時間ほど経ってからです。

7. 異能

「お久しぶりですわ。おじさま」
「うん、久しぶりだね、アマーリエ」
オーウェンは部屋に入ってきたアマーリエに微笑みかけた。
「ひょっとして、息子が何かしたかい。泣いてただろ」
アマーリエは少し頬を赤らめ、オーウェンを睨みつけた。
「そういうことは、黙っておくのがマナーですわよ。少し、昔のことを思い出しただけですから」
「あっそう。ウィリアムは君のこと、覚えていたかい」
「いいえ。アマーリエ皇女には会ったことがある、とか言っていましたけど」
不満そうに言うアマーリエを見て、オーウェンは苦笑いを浮かべた。
「だろうね。あの子は人に興味を持たないから。皇女の顔だって、まともに見てもいなかったんだろう。でも、君のこと自体は覚えているかと思ったのになぁ」
オーウェンはくるくると手に持ったペンを回した。
「だって、月の精霊って子供だったのか、とか言ってたんだよ？」
父親に連れられて、一度だけ訪れた時、確かにウィリアムはアマーリエにそう言った。
「魔力がないから、実体化していない精霊なんて見えるわけ無いのに。でも、きちんとシュレイツ姓で名乗りましたわ」
「ローツェル姓じゃなくて？」
「ええ。あの頃は、まだ母のことが好きでしたから。ところで、父がどこにいるか、ご存じですか」
アマーリエが尋ねると、オーウェンはゆっくりと首を振った。
「でも、半年もすれば、皇宮に一回戻ると思うよ。リオン君も成人だしね」

弟の名前が出てきて、アマーリエは首をかしげた。確かに、弟は今年で十六歳だったが。
「知らない？　ハーシェンドでは、子供が成人したら、離婚してもいいんだよ。大体、あいつ馬鹿だよ。あれは相思相愛だ」
アマーリエは、えっ、と声を上げた。
「相思相愛？　母は、魔術を嫌っているんですよ？　父は、魔術師どころか、魔法使いだったのに。確かに、私が魔力を発現させるまでは隠していたようですけど」
「フリーデルトは、ハロルドが魔法使いだったことを知っていたさ。希少生物よりも珍しい魔力無しだけど、魔力を発現させた人間には敏感だ」
アマーリエは、机の上に身を乗り出す。
「じゃあ、どうして私のことを、あんな目で見るの」
「君のその、リボンのせいさ。それを操るのは、魔術でも、魔法でもない。君自身だよ。魔術も魔法も、他者の力を借りる。魔力とは、現象を起こすものではなく、他の存在を認識し、それらと言葉を交わすための能力に過ぎないからね。それに対して、自分の力で外界に影響を与える人物を、異能者という。君の母上、フリーデルトがおそれているのはその異能だよ」
そんなわけないわ。アマーリエは座り込んだ。
「君は異能者だよ。向き合ってみれば便利なものだ。残念なことに、僕の異能は遺伝しなかったけど」
アマーリエは顔を上げた。
「おじさまも……？」
オーウェンは微笑んだ。指で頭をつつく。
「僕はね、予知能力者なんだよ。そうでなければ、グランベリ伯に拾ってもらえなかったし、王座だって手に入らなかった。ハロルドが魔法を扱えることを知っていたからこそ、協力させることができた。でも、魔力を隠そうとしている人間が手伝ってくれるわけ無いだろう。だから、敢えて彼を怒らせてみた」

アマーリエは無言でオーウェンを見上げた。
「僕が予想した通り、彼は興奮すると、周りの物体を動かすタイプの異能者だった。それをきっかけにして仲良くなったんだ。ハーシェンドの王族にはたまに出るんだ。現に、大陸東岸では異能は受け入れられている。大陸西岸までその考え方が広まるのがいつかはわからないけれど、ごく普通のことだ。まぁ、君のは少し変化しているみたいだけど」
「変化？」
「だって、そのリボン、自分の意志で動かせるだろう。多分、他のものも動かせるんじゃないかな。ハーシェンドの初代国王は、生物以外なら、何でも動かしたらしいけど、本当は君の父親を含め、無意識下でのみ使える異能だ」
アマーリエは左腕に巻き付いているリボンを見た。確かに、何度も利用してきたけれど
「とりあえず、練習してみることだね。せめて、そのリボンを外せるようになれば、フリーデルトだって、無闇に恐れることはなくなるだろう。そうなれば、国に戻れるよ、皇女としてね」
アマーリエはじっとリボンを見つめた。

7. 異能（後書き）

8．お忍び、その１（前書き）

8．お忍び、その1

「後はこんなものかしらね」
アマーリエはそう言って、ウィリアムの前に書類の束を置いた。量はあるが、最初に見た時よりかは少なくなっている。
「早いな」
「そう？　このくらい、普通じゃないの？」
アマーリエはそう言いながら、両手を、ティーセットに向けてつきだした。目をつぶって集中する。
ティーセットは、かたかたと動き出し、浮かび上がった。かなり危なっかしい動きで、アマーリエに向かって飛んでいく。
「魔法か？」
ウィリアムが声をかけても、アマーリエは反応しなかった。それだけ集中しているのだ。
やがて、彼女の手の中にそのティーセットが収まった。アマーリエは満足げな表情を浮かべる。スカートを翻しながら、嬉しそうな表情でウィリアムに振り返る。
「異能よ。それに、私は魔法は使えないの。言ったでしょう？」
アマーリエは、ティーセットを机の上に置くと、鼻歌でも歌い出しそうな雰囲気で部屋を出て行った。お湯を取りにいくためだ。
「異能？」
ウィリアムは首をかしげた。魔法と魔術の区別もわからないのに、またわからないものが増えた。
アマーリエが護衛役になってから、半月ほどが過ぎていた。

「そういえれば、なんだか皆、うきうきしているみたいだけれど、何かあるわけ？」

言われてみれば、城の中の人間は、どこか浮き足立っていた。とはいえ、ウィリアムにとっては単なる年中行事の一つだったので、たいした感慨もない。
「いわゆる、建国祭の類が近いからだろ」
「いわゆる、ってどういう事？」
アマーリエが、紅茶をゆったりと飲みながら言った。
「純粋にそれだけって事じゃなくて、成人祭と騎士の叙任式を兼ねているから。というよりも、建国祭って言うのは、馬鹿騒ぎの名目であって、目的ではないということ」
ウィリアムは書類を片付けると、ぬるくなった紅茶に手を出した。猫舌なので、ぬるいくらいが丁度いい。
「なにそれ。成人祭って、普通、夏でしょう？」
成人祭は一般的に、夏、それも、かなり秋に近い頃に行われる。一部地域では、収穫祭か何かとまとめられているくらいだ。その年に十六歳になるもの全てを成人と認めるので、収穫の時期に被らない程度に、遅い時期にやる。西大陸（アールシリア）のように、年明けと共に年を取るなら別だが、東大陸（グランシア）では満年齢で数えるので、遅い子に合わせよう、ということらしい。
「でも、この国はシムシムの栽培が盛んだから、夏場は収穫期と重なって、苦情が出る。秋は秋で忙しいらしいし、冬にやるのもどうかっていうことで、春になったんだよ」
「……シムシムって、何」
アマーリエはどこかぐったりした声で言った。
「穀物の一種だけど、ハーヴァル平原でしか育たない変な草。味と外見は米に似てるけど、パンにすると、小麦で造るよりおいしくなる。初夏に種をまくと、夏の終わりまでに育つし、人でもかからないしで、かなり便利」
「ハーヴァル平原って、ステノブルクの中心部にある、あのだだっ広い平原？　なんか土が、紫色だったんだけど」
アマーリエが気味悪そうに言うのを見て、ウィリアムは、そんな

ものかな、と言った。
「あの土さえあれば、ここでも育つんだ。昼に食べたパンも、シムシムが原材料だったはず。気味悪がっても、もう遅いと思うんだけど」
「そんな、嘘でしょ。おいしいと思っていたのに、どうしよう」
「でも、花は綺麗だよ。夏になったら、城の裏手一面に、薄紫色の花が」
「食べ物と鑑賞物は別よ」
アマーリエは、ウィリアムの言葉をぴしゃりと遮ると、手で顔を覆った。
「あぁ、どうして今まで気づけなかったのかしら。お父様は、あの土地は精霊に愛されているとか言っていたけれど、私はだまされないって誓ったのに」
「だまされ……。あれはシムシムの色であって、他の作物も普通に育つんだけど」
「あり得ないわよ、そんなの。だからこの国の人間は、何もかもひとまとめにしたがるのね」
なんだか、おかしくなってきたアマーリエを見て、ウィリアムは、どうしようかと悩んだ。アマーリエは、補佐としては優秀だが、変なところでこだわる癖がある。別に、どんな色の土から生えてようと、毒があるわけでもなし、食べられたら十分ではないか。
「だったら、城下に降りよう。あそこなら、いろいろそろってるはずだから」
ウィリアムがそう言うと、アマーリエが、それもそうね、と言った。
「食べられるものを、買い込むしかないわ」
ウィリアムは内心、そんなの人に頼めばいいじゃないか、と思ったが、口には出さなかった。

8．お忍び、その１（後書き）

街に降りるところまでいけませんでした。シムシムのせいです。シムシムが植物として間違っているような気がするのは、私だけでしょうか。

9．お忍び、その2

「お前、その格好で行くの」
翌朝、ウィリアムは呆れたようにそう言った。
「もちろんよ」
アマーリエは胸を張って答え、スカートの裾をちらりとあげた。短いズボンの裾が見えた。
ウィリアムは目線をそらせ、引きつった笑みを浮かべた。だったら、スカートなんてはかないでほしい。というか、見せるな、と内心思った。
「そうですか……」
「そうなのよ。で、どうやって行くの？　やっぱり、歩き？」
アマーリエは楽しそうに見上げてきた。……シムシムのことは覚えているのだろうか。
「いや、馬で。広場までは、結構距離があるから」
城下町、というか、ソフィアの街は、中央に大通りが通っている。その大通りには大抵のものがそろっている。が、街の中心にある広場で屋台が並んでいるのを見る方が、面白い。少なくとも、ウィリアムはそう思っている。
「馬？」
アマーリエは、不服そうな声を上げた。
「乗れるだろ？　ひょっとして、無理とか？」
ウィリアムが、そんなわけないよな、と振り返ると、アマーリエは黙り込んでいた。微かに、口元がこわばっている。
「あぁ、乗れないんだな」
「のっ、乗れるに決まっているじゃない！」
アマーリエは、頬を微かに赤らめて言ったが、説得力はまるでなかった。
「いいよ。今日はとりあえず乗せてやるから、次、腕前とやらを見

せてみろ」
「だって、南には、馬なんていなかったわ……」
ウィリアムは、南について、本で読んで知っていた。だから、嘘だとは思ったが、口には出さなかった。こんなところで、暴れられると、面倒だからだ。
アマーリエは、悔しそうな表情を浮かべていたが、大人しくついてきた。

「人が、多いのねぇ」
アマーリエは物珍しそうに、朝市でにぎわう街を見回した。
広場には、びっしりと屋台がでていて、上を向いても、空が切れ切れで、よく見えない。休日と言うこともあり、人々の数も多く、小柄なアマーリエは、油断すると、すぐに流されそうになる。
「そりゃ、朝市だからな。あんまり油断してると、はぐれるぞ」
ウィリアムはアマーリエの腕を掴んで引き寄せた。
「な、何？」
「見てて危なっかしいし、掴まっとけ」
アマーリエは少し躊躇したようだが、渋々といったように腕を伸ばしてきた。
ウィリアムは背が高く、やる気があったかどうかはともかくとして、それなりに鍛えている。一人でふらふらしているよりかはましだと判断したのだろう。
「こういうのは、初めて？」
「えぇ。マーヴェルでは、風紀が乱れるとかいって、屋台は好まれなかったから」
「そう言えれば、閑散としてた気もするな」
ウィリアムは、マーヴェルの首都の様子を思い出した。
整然と、碁盤の目のように区切られた街。道行く人々は、きっち

りとした格好をしていて、声を上げることもない。部外者をまったく受け入れようとしない、どこか頑なな雰囲気が漂っていた。
「でも、こういう風に、賑わっている方が、まともだと思うわ」
アマーリエは、いろいろな屋台を見て回りながら、飴細工やら、お菓子の類を買い込んでいった。やっぱり、シムシムの事なんて、忘れたんだろうな、とウィリアムは思った。

「ウィルじゃないか」
人混みを抜けて、一息ついたところで突然かけられた明るい声に振り向くと、茶髪の青年が手を振っていた。
「知り合い？」
アマーリエに尋ねられたが、ウィリアムはあらぬ方向を見た。そして、しばらくして、大きく頷いた。
「ジェフリーだ。……多分」
「あぁ、覚えていてくれたか。忘れ去られたかと思ったんだが。隣の美人さんは誰だ？　彼女？」
ジェフリーは、ウィリアムが最後に付け足したつぶやきなどまったく気にせずに歩み寄ってきた。国境守備の騎士団に入ったので、半分忘れかけていたことは、黙っていた方がよいのだろう。
「彼女じゃない。俺の護衛」
「は？　ってあぁ、魔術師か。でも美人だな。俺的には、もうちょっと胸があった方が好み？」
次の瞬間、ジェフリーは蹴り飛ばされていた、アマーリエに。
「きれいに決まったなぁ……」
ウィリアムは、思わず感心してしまった。
「貴方も、そういうこと、考えてるんじゃないでしょうねっ」
「えと……」
睨んでくるアマーリエから目をそらし、なんて答えるべきなんだ、

とウィリアムは思った。下手なこといったら、同じような目に遭いそうだ。
「男なんてそんなもんだろ、夢見ちゃ駄目だって、お嬢さん。はは、シムシムパンあげるから、機嫌治してよ」
「そんな、気味の悪いもの、食べるものですかっ」
アマーリエは叫んだ。ウィリアムは、一応覚えていたのか、とのんきなことを思った。
「でも、シムシム食べると、胸が大きくなるよ？　美容効果抜群。不気味なのは外見だけさ。なっ、ウィル」
「そう言う説もあるにはあるけど……」
それを聞いて、アマーリエの動きが止まった。
「いいわ。それで今回は許してあげるわ」
でも、データなんていくらでも改ざんできるのに、と言うウィリアムのつぶやきは無視されたようだった。

１０．お忍び、その３

結局、シムシムへの嫌悪感は治まったらしい。それでいいのだろうか、とは思うが、嫌だと言われても面倒なので、訂正しないことにした。まぁ、信じていたら、本当に何かしらの効果があるかもしれない。義姉はそういうのを、“偽薬（プラセボ）効果”と呼んでいた気がする。違うのかもしれない。

ジェフリーは笑って去っていった。結局あいつは何だったのだろう。

とりあえず、広場の隣にある公園のベンチに座って、休憩することにした。アマーリエは飴細工を食べている。

「そういえれば、木材とか、運んでいる人が多いわね」

「建国祭の準備だろ」

「でも、十六、七くらいの人ばっかり」

そこで、ウィリアムはなるほど、と思った。この風習は、確かにこの国独自のものだ。

「建国祭は成人祭も兼ねてるって言っただろ。だから、準備も新成人がするんだ。後かたづけは皆で一斉にするんだけどな」

「貴族も？」

「そうだよ。まぁ、貴族の子弟は指示したりとか、そう言う役を回されることも多いらしいけど。俺は舞台設営で、肉体労働だけだった。そこで、ジェフリーとも知り合ったんだ」

「ふぅん、なるほどね」

アマーリエは、背伸びをすると、紙袋から飴を一つ取り出してよこした。

「何だ？」

「だって、私が独り占めしているみたいじゃない」

見られてる、とアマーリエはつぶやく。

おそらく、アマーリエが一人で菓子を食べているからではなく、

その美貌に立ち止まっている輩が多いのだろう。しかし、幸か不幸か、彼女はそれにまったく気が付いていない。
ウィリアムは言われた通り、飴をなめた。黄金色をしたそれは、酷く甘かった。
「この飴、シムシムが混ざってる」
ウィリアムが言うと、アマーリエは、嘘でしょう？と言った。袋にかかれた原材料を見て、がっくりと肩を落とした。
「この国、シムシムに汚染されているわね」
汚染されているかどうかはともかく、大抵の食品にシムシムが混ぜられているのは確かだったので、言い得て妙だ、と思った。
「そういえば、魔術と魔法の違いって、何なんだ。よくわからないんだけど」
アマーリエは少し首をかしげた。
「魔術は精霊、魔法は妖精の力を借りるの。常識でしょ」
「いや、精霊と、妖精の違いもよくわかんないんだけど」
少なくとも、常識ではない。魔力自体は大抵の人間が持っている。しかし、それを操るのはごく少数だ。原理などを知って使っている人間が、一体どれくらいいるというのか。ひょっとして、南にいたせいで、感覚が狂っているのだろうか。
アマーリエは、仕方がないわね、と長い髪を手で払っていった。
「精霊って言うのは、魔力の強い人間、主に魔法使いの魂のなれの果てよ。だから、契約する時に教えられる真名は、生前の名よ。妖精は、世界の根幹を形成しているモノよ。契約とか、そういうのはできないけど、精霊よりも大きな力があるわ。ただ、世界への影響力も強いから、生半可な魔力じゃ、呼びかけにも応じてもらえない」
「で、アマーリエは妖精とは話したことがない？」
「そうよ。だから、魔術師であって、魔女ではないの。まぁ、お父様が魔法使いだから、妖精の姿を見たことはあるわ」
ウィリアムは、ふと思い出した。魔法使いなんて、早々お目にかかれるものじゃない。

「ひょっとして、ハロルド・ローツェルか、その人」
「え、えぇ。そうだけれど、会ったの？」
アマーリエが驚いたように言うので、ウィリアムは戸惑いながら頷いた。
「一月ぐらい前に、ベリルと戦争する準備をしておけ、って言ってたけど」
「他に、何か言ってなかった」
身を乗り出してきたアマーリエに、ウィリアムは少し戸惑った。顔が近い。
「い、いや。なんか、娘を怒らせたら首が飛ぶかもしれないから、気をつけなさい。とか言っていたような。お前、なんかやったのか？」
「……」
そこで、アマーリエは自分の体勢に気が付いたらしく、頬を赤らめた。
「ごめんなさい」
「いや、いいけど。でも、父親探してるのか？」
アマーリエは首を振った。
「別に、弟に聞けば、居場所はすぐにわかるわ。近くにいるんだったら、聞きたいことがあったんだけど。まぁ、急ぐ事じゃないからいいわ」
そして、アマーリエは立ち上がった。
「そろそろ、城に戻りましょう」

11．成人祭

しゃん、しゃん。

壇上の少女の動きに合わせ、手足につけられた鈴が鳴る。その涼やかな音は、息を潜めて見守る人々の間を縫って、響き渡る。

音楽が替わり、少女はショールをふわりと投げ捨てた。天女の羽衣のように、軽やかに舞ったショールは、音もなく床に落ちた。少女は腰に履いた剣を抜き、勇壮な剣舞を見せる。

どん、と太鼓が鳴り、脇から、数人の少女が出てきた。彼女らは、羽根を付けていた。精霊を模しているのか、それらは半透明だ。剣舞をしていた少女が力尽き、崩れるように座り込むと、彼女らは少女を励ますように取り囲み、祈りを捧げる。

すると、少女は立ち上がり、剣を天へ掲げた。剣は陽光を反射し、きらりと光る。

人々は立ち上がって、『エル・トゥーサ。エヴァ・ラトゥーサ』と叫んだ。これは古代共通語で、かなり意訳すると、“神の都。ラトゥーサよ、永遠なれ”である。ちなみに、ステノブルクの首都はソフィアで、まったく関係がない。

「懐かしいわ。マーヴェルの初代皇王の話よね」

アマーリエはうっとりしながら言った。彼女の言う通り、マーヴェル皇国の、初代皇王・アルフリードの劇だ。なぜ、こんなものがこの国でも演じられるのかというと、この国の元になった国の一つ、アイリーンがマーヴェルの属国だったことと、単純に人気があるからだ。

東大陸（グランシア）では、女性に継承権を基本的に認めていないから、男を差し置いて即位したアルフリードは、英雄的存在にされている。だか

ら、国を問わず、成人祭の出し物として演じられるのだ。
そう、今日は成人祭。一般的には、建国祭の一日目だ。これから三日間、人々は祭りの雰囲気に酔いしれるのだ。
「懐かしい、って。お前、十七だから、去年やったはずだろう？」
ウィリアムは、傍らのアマーリエをいぶかしげな表情で見下ろした。
「私の時は、シンデレラだったのよ。我が儘な姉役なんて、誰が喜んでやるものですか」
アマーリエは、思い出すのも腹立たしい、といった様子で言った。
「それは、お気の毒に。でも、珍しいな。普通は創世記か、武勇伝の類だろう？」
「理由なんて知らないわ。一月も練習につきあわされた、こっちの身にもなってほしい感じ」
やれやれと、深いため息をつくアマーリエを、ウィリアムは無言で見つめた。最初に出会った時の神々しさなど、欠片も残っていない。
「よぉ。元気してたか、ウィル」
肩を叩かれ、振り返ると、ルーカスが笑っていた。傍らには、白銀の髪の美女がいる。
「ルー。早かったな。もっとかかるかと思ってた。隣の人って、ひょっとして」
「そうだ。我が愛しのローゼリアだぞ。どうせ思い出せないだろうし、早くお前に見せてやろうと、急いで帰ってきたんだぜ」
彼女、ローゼリアは頭を下げ、ウィリアムを見てから、アマーリエを見て、はっとした顔をした。
「アマーリエ。アマリーじゃない。どうしてここにいるの」
ローゼリアはアマーリエの前に膝をついて両手を握り、今にも泣き出しそうな顔で言った。
「今、この人の護衛をしているの。でも、ローズに会えて、嬉しいわ、私」

アマーリエはそう言って、にこりと微笑んだ。
「あぁ、アマリー。私も、貴女に会えて、とても嬉しいわ」
女性二人が感動の再会を果たしているのを見て、ウィリアムとルーカスは戸惑っていた。果たして、声をかけていいものか。
「ええと、彼女は」
「アマーリエ・ローツェル。彼女も言っていたけれど、俺の護衛って事になっている」
ウィリアムがそう言うと、ルーカスは眉根を寄せた。
「ローツェル姓？　シュレイツ姓じゃないのか」
「シュレイツ？　マーヴェル皇家の姓？　まさか、違うだろ」
ウィリアムが笑い飛ばすと、ルーカスは、なるほどな、とつぶやいた。
「何が、なるほどなんだ？」
「いや、こっちの話」
いつの間にか、ローゼリアも立ち上がり、二人はこちらを向いていた。
「アマーリエ。こいつは、ルーカス・フォン・リグリーシュ。俺の補佐」
「初めまして」
「初めまして、アマーリエ・ローツェルですわ」
アマーリエは、宮廷作法通りの礼を取った。

１２．ベリル、その１（前書き）

視点がベリルに移ってしまいました。私はそういうの好きなんですが、視点が変わるのは嫌、という方は、サブタイトルにベリルと付くものは飛ばしてください。読まなくても、ストーリーは繋がりますので、よろしくお願いします。

12．ベリル、その1

山岳地帯の小国。それが、ベリルだ。首都の名は、ラクアバート。そこにある城の名は、エルシアテーゼ。エルシアテーゼとは古代共通語で、岩窟城という意味だ。その名の通り、自然の洞窟を利用した城で、守りは堅い。内装もきちんと整えられていて、洞窟内部だとは思えないほどだ。

その城を、レヴィン・キーヌ・アーマルドは歩いていた。古代六種族の一つ、シリア族の血を引くため、黒髪と紺青色の瞳を持っている。十七、八歳に見えるが、二十歳を過ぎている。そして、ベリルの王でもある。

腰に帯びた大剣を鳴らしながら歩いていると、元帥である、ガイス・アグリエルが向かい側からやって来た。白髪の老人の姿をした魔法使いに、レヴィンは微かに身構えた。

「陛下。議会にも出られず、何をしておいでだったのです」

ガイスは、冷ややかな笑みを浮かべてそう言った。レヴィンは内心舌打ちをした。

「出たところで、発言権など無いのだろう。何が決まった」

国王の専制を防ぐために始められた議会制。最初はともかく、今では誤ったことを正す権利すら、国王には与えられていない。どうせ出たところで、学のない小僧呼ばわりされるのがオチだ。誰が出るものか。

「ステノブルクに、宣戦布告することです」

レヴィンは眉をひそめた。宣戦布告のためには、お飾りとはいえ、国王の許可がいるはずだが。

「何故だ。戦争を仕掛けるなど、無益だろう。“冬”もいつか終わる。それすら待てないと言うことか」

「そうでございます。今回の神の選定基準を覚えておいでですか。選定者の子供ですよ。先代の選定者が過激派によって殺されてから、

今年で十七年。確かに新たな選定者は大人になって、子供が産める歳になりました。しかし、彼女が幽閉の憂き目を見ているとすれば、どうなります。本当に、“冬”はすぐに終わると言い切れますかな」
レヴィンは黙り込んだ。“冬”というのは、神が死んで、新たな神が即位するまでの空白期間。神は選定者によって決められ、その条件は毎回異なる。別に、神がいても、人間を救ったりはしない。ただ、神がいなければ、世界のバランスが崩れ、自然災害の多発や、人心の乱れを引き起こしてしまう。今回は、実際の冬の期間まで長引いている。これは、山岳地帯にあるこの国には、確かに厳しい。
「それは……。だが、何故ステノブルクなのだ。北の、ノースウェイの方が、まだ、勝算はある。いや、戦争など必要ない。鎖国などするからこんなことになったのだろう」
レヴィンはガイスを睨み付けた。ガイスは気にせず、自身の、白く長い髭をくるくると指に巻き付けた。
「陛下こそ、何故ステノブルクにこだわりなさる。まさか、ウィリアム殿下が忘れられないとでも？　それこそ冗談ではありませんな」
ガイスの嘲笑に、レヴィンは首を振った。
「そういうことではない。どちらにしても、許可は出せん」
そう言いきると、ガイスは笑みを深めた。
「結構です。そんなもの、必要ありませんからな」
ガイスはそのまま歩き去っていった。レヴィンは黙ってそれを見送った。

放浪の剣士として生きてきた。三年前、兄王が急逝して、無理矢理即位させられるまでは。
「やっぱり、本気のやつには勝てないよなぁ」
決勝戦で負けたくせに、笑ってそんなことを言ってきた男がいる。結局、表彰式の頃には、レヴィンはすでに馬上の人となっていて、

彼とはまともに話もできなかった。それが、乱読家として有名なステノブルクの第二王子だったと知ったのは後のこと。
彼に、魔力がないと聞いて驚いたのをよく覚えている。魔力が全て、と言ってもいいこの国では、魔力を発現させることのできない人間はゴミ以下の扱いをされる。レヴィンも低くはない魔力を持っていたが、それでも馬鹿にされたくらいだ。その上、ウィリアム王子は父親に強制されるまで、剣にふれることさえしなかったという。そんな人間が、自分を一瞬でも本気にさせたのだ。
もちろん、ベリル以外の国での、魔力を発現させたものに対する仕打ちは酷いもので、レヴィンがベリルに生まれたのは幸運と言ってもいいくらいだ。けれど、あの時疑問が生じたのだ。
魔力とは、一体何なのか、何の意味があるのか、と。

１３．ベリル、その２（前書き）

今回も、前回同様、ベリルの話です。

13．ベリル、その2

ガイスは足を止めた。回廊の影から、一つの人影が現れた。
彼は、深緑色の、いかにも怪しげな布を頭から被っている。布の端から、くすんだ赤色の髪がちらりと見える。ガイスは、彼が布を取り去ったところを、見たことがない。だから、性別も、年齢もわからない。レティシアと名乗ってはいるが、それすらも疑わしい。
「こんにちわ。“農村の賢者”さん。ご機嫌いかがかな」
彼、レティシアはそう言って、人好きのする笑みを浮かべた。声も顔立ちも若い。ただ、外見など、魔術でいくらでも変えられる。ガイス自身も、そう言った類の魔術を使ったことがあるから、自身の目を信じることは無益だと知っている。大体、レティシアは二十五年前からこの姿だった。これが真実の姿だったら、目をえぐり出したってかまわない。
「私はもう、“農村の賢者”などと呼ばれる権利など無い」
昔は、農村を回り、技術を教え、簡単な魔術も教えていたのだが。
「へえぇ。その程度の良心は残っているわけ。まぁ、僕には関係ないかな」
軽薄な笑い声が響く。人を、不快にさせる声だ。
「でさぁ、ステノブルクへ戦争をふっかけるって話、どうなった？」
無邪気な顔で聞いてくるレティシアに、ガイスは、どうせ知っているくせに、と思いながら、口を開いた。
「承認された。……お前は、一体、何が望みなんだ。引っかき回して、楽しいか」
「別に。僕は、自分の目的のために、生きているだけ。そうそう、君の大事なお孫さん。すっごくいい子だね。僕、気に入っちゃった」
ガイスとは裏腹に、レティシアはすこぶる上機嫌だ。
「あの子を、リサを、早く返してくれ」
白い眉を寄せて、頼む、と言った。けれど、レティシアはふん、

と馬鹿にしたように笑うだけだった。
「目的のものが見つかったらね。でも、あの子がいるなら、あんなもの見つからなっくてもいいかな。まぁ、僕が立派な魔女にしてあげるよ。嫌だなんて言わないよね、君だって、魔法使いでしょ？」
あはは。レティシアの笑い声が、またこだました。
「まともに生きるのって、大変そうだねぇ。家族って、そんなに大事かい」
「大事に決まっているだろう。特に、リサは。早くに逝ってしまった、息子夫婦の忘れ形見だ。大事じゃないわけが無かろう」
「ふぅん。だったら、可愛がってた王様はどうでもいいの。そうか、所詮、他人だもんね。あぁ、そうだ。僕、これから、ウィル王子のところに行こうかと思ってるんだ」
ちょっと、そのへんぶらぶらしてくるわ。そのくらいの気軽さで、レティシアは言った。ガイスは、怪訝な顔をする。
「何故、ウィリアム王子なのだ。気にするべきは、リチャード王子ではないのか」
すると、レティシアはうんざりしたような顔をした。
「わざわざ、死にかけているやつの見舞いに行けっていうの？　冗談じゃない。オーウェン、っていったかな。あそこの国王の方が、王太子なんかよりもずっと危険だよ。何かさ、僕の行動が見透かされてるような気がするんだよね」
「死にかけ、だと？」
ガイスは後半を聞き流し、レティシアを睨んだ。そんな情報は、入っていない。
「そうだよ。知らなかった？　あは。でも、ウィル王子に知られたくないとかで、隠してるもんね。当然か」
「お前、いつからそんな話」
ガイスが、驚いたように言うと、レティシアは首をかしげた。そして、もどかしそうな表情で説明する。
「だから、王太子は姫君として育てられたんでしょ。両性具有って、

本人の意志も関係あるにはあるけど、結局、周囲の意志で性別、変えられるんだよね。わかるでしょ。病気がやばくなかったら、あんな優秀な人間、王子として育てるよね。間違っても、いつか手放さなきゃならなくなる姫にはしないよ」

ガイスは、言葉を失った。

「だから、あの国なのか」

「そうだよ。ウィル王子さえ消してしまえば、混乱するよ。国王には、親類縁者その他いないから。確かに、ほしいものを手に入れるだけならノースウェイでもよかったけど、やっぱり余興は必要だからね。じゃあ、こっちは頼んだよ」

そして、レティシアは笑い声の余韻だけを残して、ふっと消えた。

「リサ……」

ガイスは、空を見上げた。

13．ベリル、その2（後書き）

視点を変えると、登場人物が増えるようです。記憶力に自信のない私には、向いていないような気もします。矛盾点など発見されましたら、教えてください。

１４．襲撃、その１（前書き）

やっと、主人公達に視点が戻ってきました。

１４．襲撃、その１

祭りの最後の日には、城では夜を徹して舞踏会を開くのが、アイリーンの頃から続く伝統である。

ウィリアムは、一応顔だけ出して、その会場を後にしてしまった。アマーリエは、普段着のワンピースよりかは多少裾が長いものを着ていたが、護衛だからと、ウィリアムと共に会場を出ていた。

ウィリアムは、後ろを振り返り、アマーリエを見た。出る時に、父に呼び止められていたが、何だったのだろうか。

「でも、よかったのか」

声をかけると、アマーリエは、はっとした顔でこちらを見た。

「何が」

「いや。だって、舞踏会」

「私もあんまり好きじゃないの。寧ろ、出なくて済んで、ほっとしたくらい」

ウィリアムの言葉を遮るかのように、アマーリエは言った。気を遣っている？　そんな感じでもないようだが。だから、違う言葉をかけてみた。

「ひょっとして、踊れない、とか？」

アマーリエは少し考えるそぶりを見せた。黙っているアマーリエを見て、図星だったら嫌だなぁ、とウィリアムは考えた。

「そうね。踊れないことはないけど、苦手、って所かしら。でも、最近は本当に踊る機会がなかったから、踊れなくなっているかもしれないわ」

そのまま、黙り込んでしまう。微かに聞こえる舞踏会の音だけが、響いている。会場になっている大広間から離れた位置ということもあり、付近には最小限の明かりしかともされていない。……月明かりも一応あるし、不気味とか、そんなのではないのだが、なんだか物寂しい雰囲気ではある。

「そういえれば、父上は、何て？」
「秘密」
瞬間的に答えが返ってきて、ウィリアムはちょっと戸惑った。
「……何で」
「何でもよ。あぁ。そう言えれば、どこに行くつもり？」
そう尋ねられて、言わなかったかな、とウィリアムは首をかしげた。
「書庫に行くつもり」
「書庫？　図書館とは、別？」
ウィリアムは、そうだけど、と返した。
この国は、アイリーンと、他の二つの国を合わせたものだ。マーヴェル皇国の属国だったとはいえ、三カ国分の蔵書は案外あったらしい。その上、アイリーンの王女だった母親、つまり王妃が買いまくったので、図書館に入りきらなくなったらしい。それらを書庫に放り込んだ、というのは父の言。自他共に認める乱読家であるウィリアムは、その雑多な本を読むのが好きだった。
「分類とかしてないから、逆に探しやすいんだ」
そう言ったら、アマーリエが呆れたような声を出した。つかつかと歩み寄ってきて、隣に並ぶ。
「だから、乱読家なんて呼ばれるのよ」
「でも、本の虫より、ましだろ？」
「え？　それって、どんな差があるわけ」
……言われてみれば、差がよくわからない。そもそも、違いがあるのだろうか。語感か？
そう、内心首をひねっていた時、何か、殺気のようなものを感じた。とっさに、アマーリエを庇う。
小さな音を立てて、壁に何かが突き刺さった。少し遅れて、切れた髪が何本か宙を舞った。
「何、なんだ……」
ウィリアムがつぶやくと、アマーリエは結界を張り、杖を構えた。

「へえぇ。さすがだね、ウィリアム王子。武術は嫌いだって聞いてたけど」
外から、軽い声音が降ってきた。声だけで判断するなら、声変わり前の少年という感じか。背後で、壁に刺さっていた何かが、小さな音を立てて消えた。
「別に、好きじゃないだけだ。で、お前は魔術師、か」
「ご名答。そこで魔法使い、なぁんて言わない辺り、賢いね。でも、大人しく殺されてほしかったなぁ、僕としては」
あはは、と彼は笑った。月の光で影になって、顔がわからない。
「あなた、何者」
アマーリエが緊張した声音で言った。そこで彼は、初めて存在に気付いた、とでも言いたげにアマーリエを見る。
「へぇ。君が誰かを守るなんて、意外だなぁ。えぇと、僕の名前は、レティシア、だよ。よろしくね」
「誰が、よろしくなんてしてやるものですか」
アマーリエは、杖を振りかぶった。

１４．襲撃、その１（後書き）

いまいちサブタイトルが合っていないような気もします。訂正などは、完結してから一気にしよう、と思っています。

ウィルの一人称で書いた時は、このくらいの分量で終わっていたのに、不思議です。

15．襲撃、その2

アマーリエの杖の先から、風が渦を巻いて飛び出した。その渦は、レティシアが浮遊する、その足下に向かった。
「ちぇっ。やりにくいなぁ、もう」
レティシアはそう言うなり、空を蹴った。そのすぐ後、風の渦が、レティシアのいたところに当たり、ガラスが割れるような音を立てて消えた。
「あれは、どういう事なんだ」
「あいつの足場を壊してやったのよ」
ウィリアムが呆然とつぶやくと、アマーリエは腕を交差させながら言った。
「風よ。汝らが同胞をあるべき姿に戻せ」
レティシアは、両腕を広げた。マントの隙間から、白い肢体がちらりと見えた。そして、口の端だけで、にやりと笑う。そして、その姿がふっとかき消えた。
ウィリアムはため息をついた。もう安心だ。そう思って、アマーリエを見上げる。だが、アマーリエは何事かを古代共通語で唱えていた。そして、手を叩く。
申し訳程度にともされていた炎が、一瞬にして消え去った。
「え」
ウィリアムがどういう事なのかアマーリエに尋ねようとした時に、首筋に酷く冷たい何かが押しつけられた。
「これは……」
「ねぇ。魔術師だからって、魔術を使う必要なんて無いよね？」
背後から、レティシアの声がする。ウィリアムは、息をのんだ。ピリッとした痛みと、熱さを感じる。
「あら。あなた、思いっきり魔術を使っていたじゃない。床に対して結界を張らなかったのは私のミスだけど、気配も、隠したでしょ

う？」
アマーリエの、どこか冷めた声がした。そして、続けた。
「それに、私、水属性の魔術だって習得しているわ。あなたなんかよりもね」
首筋に当てられていたものが、砕け散った。破片が飛んできて、それが氷だったと知る。
「本当にやりにくいなぁ」
あはは、と笑って、レティシアはウィリアムの首に爪を立てながら、何かを唱えようとした。しかし、そのすぐ後で、はっとしたような声を上げる。
「精霊が」
「当然じゃない。あなたの髪の色からして、炎属性だとわかったもの。髪の色も変えた方がいいんじゃない？」
アマーリエの小馬鹿にしたような言葉に、レティシアは、まぁね、と言った。
「いいや。今回は引いてあげよう。どうせ、これが目的、っていうわけでもないし」
首筋から指の感触が消え、背後の気配もかき消えた。
やっと目が慣れてきて、アマーリエの姿が見えた。
「レティシアは？」
「消えたわ。完全にね」
そう言ってから、アマーリエが床に座り込んだ。
「大丈夫か」
「えぇ。苦手な炎属性の技を使って、疲れただけ。……その怪我も治せないわよ」
え？　とウィリアムは聞き返した。怪我？　そう思いながら、首筋に手をやる。そうすると、浅い傷があった。
「別に、このくらい放って置いてもかまわない。そうか。光魔術は炎属性だったな」
なるほど、と頷くと、アマーリエは呆れたような視線を投げかけ

てきた。
「そうよ。だから、まぁ、怪我しても助けてあげられないわ」
ウィリアムは軽く笑って、立ち上がった。アマーリエも立ち上がろうとして、けれど、座り込んだままだった。
「安心したら、腰が抜けたようね。私ったら、馬鹿みたい……」
風の精霊に、と言いかけたアマーリエを抱き上げた。多分、置いていったなどと知られると、面倒なことになる。
「何するのよ。風属性の魔術師は、空が飛べるのよ」
「あぁ、そう。でも、明かりは点けれないのか」
「……あいつに使わせないために、かなり遠くまで追い払ったから、無理よ」
アマーリエの頬が、微かに紅潮している。いらいらした表情で言い切ると、アマーリエはふんっと顔を背けた。
「ねぇ。貴方、目が悪いでしょう？」
ウィリアムは口ごもった。
「それは、まぁ、夜目は利かない方だけど」
「実は、あんまり見えてないんでしょう？　本の読み過ぎで。……壁にぶつかる前におろして頂戴」
そこまで悪くない。ウィリアムは小さくつぶやいた。悔しかったので、アマーリエの言葉は無視することにした。

１５．襲撃、その２（後書き）

16．書庫

「こんな所で本なんか読んだら、目が悪くなって当然よね」
アマーリエが周りを見回しながら言った。濃い青色のワンピースの裾が、彼女の動きに合わせ、ふわりと舞い上がる。
「何で、目が悪いって決めつけてるんだ……」
ウィリアムはそうぼやきつつ、書庫を見回した。いつもながら、崩れそうなほど本が積まれている。換気用の窓があるはずなのに、それも見あたらない。明かりを点けるが、その明かりすら弱く、大して明るくはならない。壁際に無造作に置かれた机と椅子。そこ以外は、本が支配している。本棚も昔はあったのだが、今ではすっかり埋もれてしまって、本の墓場のような様相を示している。
「天使と悪魔についての考察？　何これ。こんな本、南にもないわよ」
怪訝な顔をして、アマーリエは部屋を歩き回った。可憐な容姿とは似付かず、乱暴に本を蹴って移動している。そのくせ本の山が崩れないのは、魔術を使っているからだろうか。
「シムシムを育てるために……貴方、これ、読んだの？」
アマーリエが紫色の、園芸書にしては分厚い本を見せてきた。紫と言っても、不気味な色合いで、毒が塗ってあっても、さして驚かない。
「さぁな。読んだ内容って、あんまり覚えてないから、ひょっとしたら読んでるかもな」
「まぁ、覚えるほどの内容の本があるとは思えないけど」
さらりと酷いことを言うと、つかつか歩いてきて椅子に座った。手には、『恐怖の城百選』がある。あんな本、あっただろうか。
「目が悪くなるぞ……」
ウィリアムは自分のことは棚に置いてそう言ったが、無視された。
「ところで、どうしてレティシアが襲ってきた時、あんなに平然と

していたわけ？　魔力もないんだし、もっと慌ててもよかったんじゃない」
おどろおどろしい地獄絵図に目を落としながら、そんなことを言ってくる。見た目と行動のギャップの方が何となく気になった。
「いや、最初のあれ以外は、殺気を感じなかったから。ところで、最初のあれは何だったんだ？」
あの感じは、矢か何かだろうか。後で消滅してしまったが。
「あれは普通の矢に風をまとわりつかせただけよ。矢は、精霊の力に耐えきれなかったみたいだけれど。……でも普通、あんなの気が付かないわよ。初歩の初歩みたいな術だから、かえって避けにくいのよ」
血まみれ城の絵を指で押さえたままため息をつくアマーリエから、ウィリアムは目をそらした。街中の人々の目を攫った美少女の趣味が、これだなんて。
「師匠のに比べたらあんなの屑だ。あの人、こっちが油断している隙をねらって撃ってくるんだ。魔力の塊とか、弓とか、短剣とか。父上が殺さなきゃいいって言ったから、どんどんエスカレートしていって」
昼寝中に槍が体をかすめた時、どんなに恐ろしかったか。
「……不意打ちって事？　剣術の師匠なんでしょ？」
「俺が目で見るより、気配で動くタイプだったからかな。最初は目を開けて、剣筋を見ろ、とか言ってたんだけどさ、ある時から教育方針が変わったらしくて。おかげで腕も上がったけど」
でたらめよ。それしきで剣術大会準優勝なんて。アマーリエがそう言って頭を抱えた。
「そんなこと聞いたら、私の努力は何だったわけ？　って気分になるわ。十年かけてもいい魔術理論を、一年で習得するために費やした努力は何なのよ」
「それとこれとは、別だと思う」
ウィリアムのつぶやきに、アマーリエはがばりと頭を上げた。

「私だって、剣やら槍やらの稽古はしたのよ。それを、目をつぶって、ですって？　信じられないわ。手だって荒れたのよ」
そう言って眼前に指を突きつけてくる。彼女には気になるようだが、ウィリアムからすれば十分綺麗な手だった。たしかに、妙なたこやらはあるが、手入れはしているらしく、爪だって整えられている。突き出された手を取って、小さいなぁ、と思った。
「十分綺麗だろ。理想が高すぎるんじゃ……」
「うるさいわ。女の子の悩みは深淵なのよ」
手を振り払われて、ウィリアムは呆気にとられた。論理の展開が破綻しかけているような気もするが、それ以前に、アマーリエの基準がわからない。
ふと、アマーリエのすみれ色の瞳と目があった。青みがかった紫の高貴な光は、じっとりと睨み付けてきているはずなのに、とても魅力的だった。
「でも、アマーリエは美人だろ」
「何よ、それ。意味不明よ」
本が顔に向かって飛んできたので避けると、背後の本の山が盛大に崩れた。アマーリエはそれを見やると、部屋の外に出て行った。
「あれって、褒め言葉だと思ったんだけど」
何か、怒らせたらしい。ウィリアムは首をかしげた。

17．夜

アマーリエは中庭を歩きながら、路の小石を蹴り上げた。石は、小さな音を立てて、草むらの中に潜り込んだ。

「私って、ほんと、馬鹿」

触れられた手が熱いような気がするのは、きっとまやかし。幻想だ。

「何、意識してるのよ……。あんな失礼な奴、どこがいいのよ」

胸が高鳴っているように感じるのは、きっと気のせい。触られた方の手を胸に当て、もう一方の手で覆う。そんな無意識の行動に、お前は恋する乙女か、ってかんじで我ながら腹が立つ。なんだか、草でもむしりたい気分だ。

「……て、本当に草むしりができそうね。ここって、王城なのよね？」

草むら、というか、雑草の茂みを見てつぶやく。確かに、アマーリエのいる場所は中庭と言っても、人目には付きにくい場所ではある。しかし、人間の背よりも高い雑草を放置しておくだろうか、普通。無精な庶民の庭ではないというのに。

そんなことを思ってしまう自分に、アマーリエは苦笑いを浮かべた。先ほどまで考えていたことが、馬鹿馬鹿しく思えてくる。自分の意志ではなかったとはいえ、もはや自分は、処女ではないというのに。

「いちいち、こんな事で悩んでたんじゃ、きりがないわね」

夜風が、優しく頬をなでる。冷たいそれは、熱を奪っていく。

「あぁ、でも明日、どんな顔して会えばいいのよ。ついはたいちゃったし」

謝るべきだ、というのはわかるんだけど、なんだか気恥ずかしい。すぐにかっとなる性格を直すべきだとは思っていたが、言葉よりも先に手が出るのもまずいような気もしてきた。

「どうしよう……」

考え事をしながら歩くと、人にぶつかるという。アマーリエは生まれて初めて、そんな馬鹿な経験をすることになった。

大丈夫？　と手を差し伸べられ、アマーリエは現実に引き戻された。

「王太子殿下？」

アマーリエが呆然とつぶやくのを見て、リチャードは怪訝そうな顔をした。

「そう、だけど。本当に、大丈夫？」

本気で心配されているらしいことがわかり、アマーリエは立ち上がった。

「すみません。考え事をしていまして……。あの、殿下の方こそ、大丈夫ですか。顔色が、少し」

月光の下だからか、リチャードの顔は、青白く見えた。

「無理矢理酒を飲まされてね。まぁ、気にしないでくれ。……ところで、ウィルは？」

「……多分、書庫です」

そう答えると、リチャードはそう、とつぶやいた。しかし、顔色の悪さは、決して酒のせいだけではないだろう。アマーリエが不審に思った時、リチャードが咳き込みだした。アマーリエが何もできずに突っ立っていると、一人の女性が走ってくる。

「マティルダ様……」

アマーリエがつぶやくと、マティルダは唇を尖らせた。

「従姉妹なんだから、様付けなんて、止めて頂戴」

そんなことを言いながら、リチャードを背後から支え、その口元に液体の入った小瓶を差し出した。

「リチャード。ゆっくり飲んで」
とはいえ、咳き込んでいて、うまく飲み込めないリチャードを見て、マティルダは、仕方ないわね、とつぶやいた。小瓶の中身を口に含み、そのままリチャードの唇に自分のそれを押し当てた。そして、液体が飲み込まれたのを確認すると、ゆっくりと離れる。
ハーシェンドの王女にして、リチャードの妻でもあるマティルダは、薬師の免許を持っている。魔女と呼ばれ、自分でもそう名乗る彼女は毒草を愛している。けれど、幼なじみの夫のことをより深く愛しているはずだ、多分。さっきの液体は、薬だろう。リチャードも落ち着いたようだ。
「これは……？」
「ウィル君には秘密よ。誰にも話さないでくれると嬉しいけど」
マティルダがにこりと微笑んだ。薄ピンク色の花のようなドレスとは違って、どこか有無を言わせない微笑みに、アマーリエはぎこちなく頷いた。
「でも、どういう事です？」
「見たまんまだよ。持病でね。二十歳まで生きられないって言われた気もする」
そう言って笑みを浮かべたリチャードに、アマーリエは眉をひそめた。
「どうして、彼には秘密なんです」
「さぁ、何でだろうね。父上は、ウィルも知っていると思っているみたいだけど。結局、……自分の心が、一番わからない」
強い風が吹いて、花びらを舞上げる。その舞い散る花びらの中、リチャードはアマーリエを見上げた。
「君だって、自分の心を完全に把握している訳じゃないんだろう？」
アマーリエは何も言わず、ただ立ちつくした。

１８．ベリル、その３（前書き）

またもやベリル編。計画（？）通りにいけば、ベリルの話はあと一回でまとまる、はずです。後はウィルとレヴィンを無理矢理出会わせるので、それで何とかなる予定です。

興味のない方は、この話は飛ばしてください。本筋には余り関係ない（と思っている）ので。

18．ベリル、その3

「では、その作戦で行きましょう」
ガイスがそう言うと共に、皆が立ち上がり、議会を終わらせようとする。
「ちょっと待て。どうして、そんなに戦を始めたがる」
レヴィンは立ち上がり、大声で言った。すると、侮蔑に満ちた視線と、小馬鹿にする小さな笑い声が起こった。
「いま、この機を逃して、いつ我が国の力を示すというのですか、陛下。くだらない武術などより、魔術の方が優れていることを示すのですよ」
議会で唯一の女性がそう言った。先々代の国王の妻、先王の母親。……今、この国の事実上の最高権力者は、ものもわからぬ童子を諭すように言った。
「あぁ、陛下はあの端女（はしため）の子供でしたわね。あの不遜な女。偉大なシリアの血を引くと言ったが、真実かどうかは疑わしいこと。よもや、あの女の馬鹿げた言葉を守っていらっしゃるのではないでしょうね。戦争は悪だ、等という」
言葉どころか、出産時の怪我が元でなくなった母の顔すら覚えていないというのに。いや、戦争は、何の理由があったとしても、避けられるべきものだろう。この女こそ、一体何を言おうとしている。
口を開こうとするレヴィンを彼女は扇で遮った。
「それとも、陛下が魔術よりも野蛮な武術を好む半端物でいらっしゃるからかしら。けれど、今回の戦で証明されるでしょう。魔術が武術よりも優れていることが」
自信たっぷりに言い切る彼女に、その場にいたものは賛同の拍手を送った。
「おっしゃる通りでございます。魔術が武術より劣るはずがない」
髭を生やした恰幅の言い男性が、そう言った。

「オルヴィス侯。……真に魔術が優れているとすれば、どうしてそれを広めようとしない。きちんとした教育さえ受ければ、魔術を習得とまではいかずとも、使えるようにはなるはずだ。皆が使えれば、魔術を無用に恐れる事はなくなり、魔術師への偏見もなくなるだろう」

「恐れながら陛下。我が国は“冬”の影響で、食糧難に陥っています。かような悠長なことなど、言ってはおられません。そもそも、我が国から魔術を取って、一体何が残るというのですか」

薄笑いを浮かべながら男性は言った。レヴィンは机を叩いた。

「何が残るか？　国の名の由来を忘れたか。お前達が身につけているその宝石は、一体どこから湧いてきたものだ。鉱脈はいつか枯れるだろうが、魔術師を守るためだけに鎖国するよりも、よほどましな話だ。前の魔術探査によって、新たな鉱脈も発見したのだろう」

レヴィンの言葉に、高い笑い声がこだました。

「何をおっしゃいますの、陛下。これだから学のない子供は困りますわ。さぁ、皆。計画通りに行動いたしましょう。たまには話を聞いてやろうかと思いましたが、くだらないことに時間を費やしてしまったようです。その分を取り返さねばなりません」

そうやって、今度こそ議会は終了した。レヴィンは彼女を睨み付けたが、彼女は意に介さず、歩き去った。

「一体、あの人達は何がしたいんだ」

どうして、負けが見えていることに気付かない？　彼らは作戦が完璧だと信じ込んでいるようだが、傭兵まがいのこともやったことのあるレヴィンには、穴だらけにしか見えなかった。冷静に考えれば、あれでは勝てないことに気が付いても良さそうなものだ。せめて、作戦を練り直すべきだろうに。

気が付けば、王妃の部屋の窓辺に近い所にいた。すすり泣きのよ

うな声が漏れ聞こえてくる。彼らは、レヴィンが知っていることに気が付いているのだろうか。
「愛も権力も、無意味だ」
レヴィンは一人つぶやいた。身分を隠しての放浪中に出会い、永遠の愛を誓った人は、今では宝玉と愛人に囲まれている。そして、何喰わぬ顔で話しかけてくるのだ。最初は腹が立ったが、今では何も感じない。王妃ともなれば、敗戦後、何らかの罪を負うことになるのかもしれない。だとしたら、別れるのも愛情なのだろうか。
「逃げ出すことは、罪だろうか」
そう、また一言つぶやいてから、歩き出した。

19．香り

扉の開く音に、ウィリアムは軽く身構えた。別に仕事をさぼって本を読んでいたのが気まずかったのではない。アマーリエにどう対応すればいいのか、よくわからなかったからだ。

アマーリエは、いつもは髪に手を加えないストレートなのに、今日は優美なシニョンにしていた。その上、薄紫色の大人っぽいワンピースを着ている。

何が、あったんだろう。

ウィリアムが黙ってアマーリエを見ていると、アマーリエは小さくため息をついた。

「おはよう。……何よ、人のことをそんなにじろじろ見て」

「いや……別に」

何やってるんだ、俺。別に、ってなんだよ。

ウィリアムは心の中で自分につっこんだ。こんな事をするなんて、なんだか、自分が悲しい。

「……もう。昨日のことは忘れなさいよ。貴方は悪くないわ」

アマーリエはつんと目をそらして、ウィリアムの目の前に本を数冊置いた。その時、ふわりといい香りがした。

「何か、つけてる？」

ウィリアムがアマーリエを見上げて言うと、アマーリエは首をかしげた。

「香水は変えてないわ。……ひょっとして、気付いてなかったの？」

「そういうわけじゃ、ないんだけど」

なんて言うか、香水とは違う、甘い香りだった。ちなみに、アマーリエがいつも付けている香水は、とある有名ブランドの、朝霧というものだ。朝霧と言うよりは、初夏の日差しを思わせるすがすがしい香りで、その不一致が逆に話題となった代物だ。その手の物に対して興味のないウィリアムですら知っているのだから、愛用者は

珍しいにしても、有名なことだけは事実だ。しかし、今朝のアマーリエの香りは、花の香りだ。緑のすがすがしい香りではない。
「……マティルダ様のが移ったのかしら。夏の新作だとおっしゃっていたけど」
「夏の新作……まだ早くないか？」
「シムシムですって。本当にあんなにいい香りがするのかしらねぇ」
怪訝な顔をしてつぶやくアマーリエに、ウィリアムは違うだろ、と思った。
アマーリエは知らないだろうが、シムシムはほぼ無臭、あってもラベンダーの改悪版とでもいう匂いがするだけだ。あれを好むのは、かなりマニアックな人物だけだろう。……香水を作った人間も、どうかしている。
「どこのブランドだよ……」
ウィリアムはぼそりとつぶやいた。聞こえないくらいの声で言ったつもりだったが、聞こえたらしい。アマーリエは、あら、と笑った。
「マティルダ様のお手製よ」
さらりと紡がれた言葉に、ウィリアムはがっくりした。
謎は解けた。確かにこの香りはあれだ。毒草好きと思しき義姉ならやりかねない。
「それはシムシムじゃない。シムシム草って言うんだ。シムシムによく似た外見で、強い毒性を持っている。……うまく使えば気管支系に効く薬になるらしいけど、痕跡が残らない上、どこにでも生えているから暗殺にも使われたりする」
アマーリエは複雑そうな表情を浮かべた。
「結構、いい香りだと思ったんだけどな」
アマーリエは寂しそうにつぶやくと、席に着こうとした。
その時、扉が乱暴に開かれた。
「ノックくらいしろよ」
ウィリアムはそう言って、扉に目をやった。

「ウィル。伝令が来たぞ」
「ルーカス？　伝令って」
何だ、と問おうとして、気が付いた。黙ってルーカスを見る。アマーリエも落ち着いた表情で見ていた。
「国境からだ。陛下の予想は大当たりだったな。開戦だってさ」
「予想……。あの、祭りの最終日に来るって言う、あれか。そういうのがわかるって言うなら、少しは止める努力をすればいいのに」
アマーリエがはっとしたような顔をした。何かに感づいたかのように。
「そうなんだよ。陛下、おかしくないか？　戦の類はできる限り回避してたのに、今回は放置だろ？　いくら子供に丸投げしたとはいえ、無関心なのも不気味だよな」
ウィリアムはルーカスに曖昧に相づちを打った。その理由には大体見当は付いていたが、ルーカスに言うつもりはなかった。それに、父は恐らく、戦場には出てこないだろうから。
「それよりお前、仕事しろよ」
「何を？　アマーリエ嬢が優秀すぎて、やること無いんだよ？」
「そういう意味じゃない……」
ウィリアムは小さくため息をついた。

１９．香り（後書き）

なんだか意味不明な話です。あんまり自覚症状はないのですが、熱を出しているようなので、生温い目で見てください。

来週は中間テストと模試と実力考査で力尽きる見込みです。まぁ、気にしないでください。

20．母親の墓

ウィリアムは下草を踏み分け、城の奥に入っていった。アイリーン以前時代から使われ続けているこの城は、無駄に広いのが特徴だ。建てられて千年は経っているであろうこの城には、つぎはぎで、訳のわからない場所がたくさんある。特に、父がアイリーンを征服した後。つまり、ステノブルクに国名が変わった時に、奥の方を閉鎖してしまったのだから、どうしようもない。母である王妃が亡くなってからは、構造を完全に知るものはいないと思っていいだろう。鬱陶しい長い髪を払うと、奥宮の中庭に足を踏み入れた。かつての王達が、自身の妻や妾を住まわせた、鳥かごに。

「父上。やはり、ここでしたか」

ウィリアムが声を掛けると、父王、オーウェンはゆるゆると顔を上げた。

「何でウィルがいるんだい」

「父上を捜していたからですが」

特に驚いた様子もなく、オーウェンは立ち上がった。

「そう。でも、僕は今回のことには口出ししないから、まぁ、適当にやりなさい」

とりつく島もなく、立ち去ろうとするオーウェンをウィリアムは引き留めた。

「どうして、母上の墓は、このような場所にあるのですか」

オーウェンは一つため息をついて、ウィリアムと目を合わせた。

「君には関係ないよ」

ウィリアムはそれ以上何も言えなかった。氷の刃が突きつけられたような、追及を許さない声音に、後ずさった。

荒れ放題の庭の中、一カ所だけ整えられた部分。そこには、小さ

な石が、墓標が立っていた。
『ルクス・L・ソフィア・モノ・アイリーン　妾の墓を犯すモノ死鬼となりて彷徨うがよい』
ウィリアムはそれを無感動に見下ろした。仮にも王妃、アイリーンの最後の姫君だ。公式の墓は別にある。けれど、其処に遺体が眠っていないのは誰も知らない。ステノブルク、いや、マーヴェルでは火葬は厳禁なのに、父は母の遺体を燃やし、骨をこんな所に埋めてしまった。墓石は、王妃付きの侍女が彫ったもので、碑文も王妃の遺言の通りだそうだ。
「母上、ね」
ウィリアムは口を閉ざした。夫婦仲がよかったという話は聞かないし、母親に声を掛けられた記憶が全くない。いや、違う。一度だけある。酷い風邪で寝込んだウィリアムに、兄を抱いた母が言った言葉。
『ねぇ、どうして生まれてきたの。どうして、まだ、生きているの。あなたが生きていくのに、どれだけの犠牲が払われてきたか知っていて？　あなたはその犠牲に値する人物なのかしら。ねぇ、迷惑を掛けない方法ってね、死ぬことしかないのよ』
ウィリアムは頭を掻きむしった。そんな物を思い出す時じゃない。覚えている必要さえない。母親が美人で、面の皮が厚かったことだけで十分だ。
「どうして、いらんことしか覚えてないんだろうな」
ぼやいた時、笑い声が起こった。
「なんだよ。……アーガルド将軍」
「いえいえ。でも、殿下もかわいくなくなりましたね。昔はジェフと呼んでくれたのに、おじさん、寂しいなぁ。半年ぶりの再会でし

ょ」
「そんなおじさんは知らない。そもそも、親戚なんかいないし」
父は孤児だし、母の親族は皆殺しにあった、この男の手で。
「それもそうか。しかし殿下。成人祭から髪を切らないのは、何かの呪いですか。ぼさぼさですよ」
「面倒なだけで、深い意味はない。……というか、何でいるんだ」
双剣の勇者ことジェフ・アーガルドは首をかしげた。頭に花でも咲いていそうな雰囲気が漂ってくる。これが奴隷の中の英雄？　冗談じゃない。
「そうそう。レンが呼んでたよって。あっ、レンってわかります？」
「そのくらいわかるよ。エルンハルト元帥だろ。ゲオルグ・レン・ラトゥーサ・エルンハルトだったっけ？」
「多分正解。あの人、皇都生まれなんだよね。だから取っつきにくいのか」
アーガルドは納得したように頷いた。ウィリアムは嫌だな、と思った。父も元帥の前では口調が変わる。多分、怖いんだろう。元帥は、前皇王が父に補佐役として付けた男だそうだが、普通、属国を奪おうとする奴に、兵を与えたりなんかしないと思う。きっと、マーヴェル皇国を理解することはできないだろう。
「でも、嫌だな、あの人」
「あはは。それはきっとみんなが思ってますよ。怖いから言わないけど」

21．ゲオルグ

ウィリアムはとある部屋の前で、深呼吸をした。
「そんなに緊張しなくてもいいと思うんだけど……」
呆れたようにアーガルドは言うと、あっさりと扉を開け放った。頭頂部で結わえられた焦げ茶の髪が、彼の動きに一瞬遅れてついていき、毛先がウィリアムの顔を掠めた。部屋の中には誰もいなかった。
「……アーガルドは髪を切るか、髪型を変えるべきだと思う」
ウィリアムが控えめに言うと、アーガルドは、ところで、と言った。
「何で誰にも名前で呼ばれないんでしょう」
「アイリーンでは、姓が先だからだ。まぁ、奴隷階級の人間は、基本的に姓を持つことを禁じられていたから、それは通し番号の一種だろうが」
背後から声を掛けられて、ウィリアムとアーガルドは振り返った。気配には気が付いていたので、別に驚いたりはしない。
「……通し番号？　お師匠様から頂いたのに」
アーガルドは訳がわからないようだったが、ウィリアムには心当たりがあった。
「神話に出てくる、大昔の数名だ。たしか、ジェフは四を意味していたはずだが」
そこまで言ってから、ゲオルグを見た。ゲオルグは小さく頷いた。
「よくご存じで、殿下。しかし、お前の師匠は本当に剣しか教えなかったようだな」
「それは否定できないなぁ……。国を守って死ぬことが名誉だとか喚いてたし。でもレン。お師匠様がいなかったら、奴隷が他国には存在しないって事も、きっと知らなかったし、国に反発しようなんて思わなかった」

アーガルドがそういうと、ゲオルグは鼻で笑い、冷たい視線を送った。
「そうか、それはよかったな。だが、いい加減にレンと呼ぶのは止めろ」
ウィリアムはつい笑ってしまった。そういえれば、小さい頃は別に怖くなかったのに、いつから緊張するようになったのだろうか。
「で、俺を呼んだ理由は」
「指揮権についてです。軍事権を全て与えられているんですから、いい加減、殿下自身で指示を与えるべきかと」
ウィリアムは、空を見上げた。面倒としか思えない。
「元帥に全て任せる。……神話、軍神降臨の第三章第二節、百十七行目から二百十五行目が丁度いいと思うんだけど」
そこに書いてあるのは、戦女神・ベアトリーチェが異世界の怪物と戦った時の話だ。ウィリアムは神話が実際の歴史とは別物だと思っていたが、彼女の立てた作戦は、魔術を主力とするベリル相手には有効だろう。そもそも、軍神降臨は、神話と言うより、兵法書に近い。
「え、何それ」
一人意味がわからず、引きつった笑みを浮かべたアーガルドは、無視された。
「あぁ、ベアトリーチェですか。確かに、あれは有効かもしれませんな。しかし、殿下が指揮なされればいいのに。陛下のように先陣を切るタイプではないでしょう？」
「今まで高みの見物しかしてなかった奴が、突然指揮なんて執ったって、誰も付いてこない。変な内輪もめが起こるのは面倒だ」
「そうですか。まぁ、陛下にも殿下が死なないように配慮しろとしか言われませんでしたし。しかし、神話そのままでは、策が読まれかねませんな」
「あぁ、それは俺も思った。だから——」
「……それなら、案外いけるかもしれませんな」

二人がアーガルドの存在を完全に忘れかけようとした時、アーガルドが声を上げた。
「ちょっと待て。軍神降臨って、現代語訳どころか、古代共通語訳すら神様が禁じていて、古語でしか読めないんですよね……？」
ウィリアムとゲオルグは顔を見合わせた。
「俺は古語が好きだったから、司書に習ったんだ。古語の中では読みやすかったと思うんだけど」
「私は古語は読めないが、陛下に教養として暗唱させられたぞ」
「陛下って、前の皇王か？　父上は軍神降臨を馬鹿にしていたし」
「そうです。大方、グリンデル辺境伯に唆されたんでしょうが」
アーガルドは、こいつら頭おかしいよ、と小声でつぶやいた。

21．ゲオルグ（後書き）

ゲオルグは、ウィルの剣の師匠……だったはずなのに、いつの間にかその設定は消えたようです。キャラが暴走しています。大筋は変えるつもりはないのですが、変えた方がむしろいい気がしてきました。

こんな意味不明な話を読んでくださって、ありがとうございます。はやく本題に入れるように努力します。

22．戦準備

ウィリアムは愛馬をなでて、ため息をついた。
「ルインは戦場は初めてなんだよな……」
つぶやくと、廃墟（ルイン）という名を持つ馬は、ウィリアムに鼻をこすりつけてきた。
「そういえれば、こいつ、どうしてこんな名前なんだ……縁起悪いぞ」
白銀の毛並みを持つ馬は、首をかしげたようだった。賢い馬なので、言葉が少しはわかるのかもしれない。
「古代共通語でも、荒廃とか遺跡の意味しかなかったし、神話から取ったのか……？」
馬は答えない。当然だ。その代わり、背後から答えが返ってきた。
「マーヴェルのグランシア地方の方言で、最高よ。もっとも、語源は同じで、腐るって意味らしいけど」
……どう言葉が変化したのか、気になる。
「アマーリエも行くのか」
アマーリエはワンピース姿ではなく、鎧を身につけていた。鎧といっても、大層なモノではない。必要最低限だけをカバーするタイプで、軽くて動きやすい。というより、デザイン性が優先された結果のような気がするのは……気のせいだろう。
「当然でしょ。私は貴方の護衛よ。せっかく馬にも乗れるようになったんだから」
ウィリアムは、アマーリエが馬に乗れるように、嫌がるアマーリエを無理矢理馬場に連れて行ったのを思い出した。……案外筋がよくて、その日のうちに乗りこなしてしまったのだが。
「あぁ、でも、ラツィエル様がいなきゃ、普通に乗れてたんだったかしら、私」
「ラツィエル？」

「母様が絶対に逆らえない人よ。前のグリンデル辺境伯……」
アマーリエが手で口をふさぎ、明らかに何かを後悔するような顔つきになったが、ウィリアムにはどうしてそうなるのかがよくわからなかった。
「グリンデル……父上を拾ったって言う、物好きな女伯爵か。でも彼女は、皇城から出られないほど多忙だったって聞くけど？　今はグリンデル地方に引きこもっているらしいし」
アマーリエは目線をそらした。わざとらしい笑い声付き。ウィリアムはつっこむかどうか悩んだが、やめておいた。さして重要だとも思われない。しかし、彼女は一体どこの出身なのだろうか。
「でも、マーヴェルでは、女性の乗馬を好まなかったはず。確か、お淑やかであれ、とか」
でも、労働力以外に馬を使うなど、貴族には違いないはずだ。そして、貴族の娘は、普通、剣も馬も習わない。商人の娘かもしれないが。
「えぇ。でも、あの頃の母は、私のしたいようにさせてくれたから。ラツィエル様も口添えしてくださったしね。でも、乗馬は許可してもらえなかったから、こっそりやっていたのよ。なのに、ラツィエル様が遠乗りに誘ってきたのよ。……そのまま落馬よ。しばらくベッドに縛り付けられたわ」
そう言ってから、アマーリエは栗毛の馬の首を抱いた。
「久しぶりね、ジェシー」
ウィリアムは言葉を失った。確かにその馬は雌馬だったが。
「その馬って、ルクスだったよな。光（ルクス）で、父上にしてはまともな名前なのに」
「いいのよ、自分の好きな名前で呼べば。大体、ルクスって、どこの言葉よ。造語じゃないの？」
「……」
ウィリアムは、思考を放棄した。父は勝手に言葉を作ったりするので、信用ならなかった。自分の記憶力も、神話以外は怪しいとこ

ろだ。否定する根拠はない。
「ところで、今回の作戦は何なの」
唐突にそんなことを聞いてきて、ウィリアムは少し戸惑った。
「神話の」
「それじゃわからないわ。神話なんて、まともに読む人間がいる訳無いわ。神様は人の中から選ばれる者であって、人を作ってなんていないわ。現に、今神は存在しないわ。人は人の決めた通りに生きるの。神話なんてよくできたおとぎ話。現代語訳ができないのに、読む価値なんて無いわ。内容を教えてよ」
ウィリアムはため息をついた。神話を読む価値がない、と言いきったのは、彼女が初めてだった。結構、役立つ部分があるのに。

22．戦準備（後書き）

サブタイトル……まぁ、気にしませんよね。

この後、戦争の細々はすっ飛ばします。ちなみに、言語は知識がないのでマーヴェル（ドイツ語とフランス語を混ぜたかった）はでたらめ、ステノブルクは基本英語（国名からして違う）です。ルクスはラテン語なので、この世界では造語扱いです。発音等は、伝えられてから時間が経っているので変化したというこじつけがあったり無かったりします。

23．戦場

陽も暮れかかった薄暗い世界。目の前に広がるのは、荒涼とした大地だった。

目の前のどこかに、ステノブルクとベリルとの国境があるはずだ。少なくとも、地図上ではそうなっている。ステノブルク側から見て左側には、高く険しい崖がある。崖の上は、マーヴェル皇国グリンデル辺境伯領で、こちらの国境線ははっきりしている。ただ、崖の上からは、崖が存在しているようには全く見えず、毎年転落事故が起きている。ウィリアムの記憶が正しければ、先々代のグリンデル伯は、狩猟中にここから落ちて死んだはずだ。……柵でも付ければいいのに、不気味なほど何もない。今回は、マーヴェルは静観することに決めたようだが、それにしても、国境の警備くらいしなくてよいのだろうか。

「ここまで何もないと、逆に不安になるわね。情報が漏れているのかしら」

アマーリエがもやのかかり始めた戦場を見ながら言う。

「……それはないと思うけど、随分古典的な方法だな。このもやは魔術なんだろ」

「そうよ。この魔術に使われている魔力より強い魔力を持っていて、この術を破る方法を知っている人間にはこのもやはないのと同じよ。つまり、あちら側からは、視界がはっきりしているわけ。……この国は、魔力を低めようとはしなかったけれど、高めようともしなかったもの。ま、持っていても使う方法がわからないんだから、このもやは実在しているのと同じよね」

二人は同時にため息をついた。

「もし情報が漏れていたら、こんな無駄なことはしないんじゃないか」

「それもそうね。知った上でこうしている可能性もないではないん

だけど」
「俺みたいな素人が考えたって無駄だろ、そんなこと。それを考えるのは元帥の仕事さ」
「そうかしら。ひょっとしたら、名案が浮かぶかもしれないわ」
ウィリアムが戦場を見やると、もやはますます濃くなっていた。この調子でいくと、呼び名が変わるかもしれない。とはいえ、基準が国ごとに違うので意味がない。
そこに、ルーカスがやって来た。
「時間だってよ」
「あぁ。でも、こんな天気で、大丈夫か？」
「死なない程度に頑張れってさ」
「……」
「自国の王子に掛ける言葉じゃないわね」
「自分で考えたんだろ。今更逃げるなよ、ウィル」
ウィリアムは馬に乗った。
「じゃあ、ほどほどに」
ゆっくりと剣を抜き、高らかに天を示す。……といっても、陽は落ちたようだが。
「進軍」
剣を振り下ろしながら、芝居じみた動作で声を上げた。
「でも、こんなもやがかかっていていいのかしら」
「相手から見えればいいかと」
「深読みされそうよね」
「というか、動きおかしかったぞ」
ウィリアムは勝手なことを言うアマーリエとルーカスを振り返った。
「うるさい。本当にお芝居なんだからいいだろ」
アマーリエとルーカスは、何かをあきらめたかのような笑みを浮かべた。
「ウィルはそれでいいんだよ……多分」

何はともあれ、戦闘状態に入ってから一時間ほど経った。
「もうそろそろいいんじゃない？」
「でも、まだ……」
話をしながら敵を倒していく二人を遠巻きに見ていたルーカスは苦笑いを浮かべた。
「案外、余裕あるなぁ……。魔術に偏重しているせいで、相手が弱いのもあるんだろうけど」
そんなことをつぶやく自分も余裕があるのだがそこは棚に上げ、ルーカスは時計を見た。
「二人とも、時間だぞ」
「ほら、やっぱり。これ以上やっても疲れるだけよ」
「それもそうか。撤退だな」
ルーカスは声を上げようとして、はっとした。崖の上から飛んでくるものは……。
「ウィル」
気付いたウィリアムは避けようとしたが、遅い。だが、アマーリエが障壁を張ったので、大丈夫か、と思った瞬間。矢は結界を突き破り、ウィリアムの胸に突き刺さった。ゆっくりと倒れ馬から落ちるウィリアムと、呆然とするアマーリエ。
ルーカスは馬を駆けさせると、周りの敵をなぎ払った。
「ぼうっとするな。動揺を広げるな」
アマーリエは慌てて結界を張った。そして、複雑な模様を宙に描く。
「あれじゃ死なないとは思うが。……陛下には怒られたくないよなぁ」
アマーリエとウィリアムの姿が掻き消えた。気付いた兵士が愕然としているのがわかる。

「ここで転移魔法を使う所なんかお姫様だよなぁ。周りのことも少しは考えてほしいんだけど」

ルーカスのつぶやきは、誰の耳にも届かなかった。

２３．戦場（後書き）

なんだか間が開いてしまってすいません。お気に入りだったＵＳＢメモリを紛失し、胸のサイズもＣに落ちたりして、落ち込んでいる作者です。

今回は、正直無くてもいい気がします。予定には入っていたのですが、書いてみると微妙になりました。

明日は受験生恒例のインフルエンザの予防接種を受けるので、生きていられるか心配です。健康には気を遣うべきです……よね。

２４．ベリル・その４

レヴィンは自国（ベリル）の軍がステノブルクと戦っているのを第三者として見ていた。

指揮権は自分にはない。それはつまり、観客と等しいこと。

そこは、戦いの全容を見るのによく適した場所だった。一見するとベリルが押しているようだが、レヴィンはそれがまやかしだとわかっていた。……端から見れば、すぐにわかる。ステノブルクの策にまんまとはまっていることぐらい。軍を指揮するガイスにはこの光景は見えない。魔法はそのような便利な道具ではない。

「さぁ、陛下。やるべきことはわかってるんだよね」

背後から楽しげな声が掛けられた。それは、レヴィンをこの場所へ誘ったものの声。

「レティシア、か」

「そうだよ。覚えてくれたんだね、名前」

戦場には似つかわしくない笑い声がした。レヴィンは眉をひそめる。

レティシアは得体の知れない男だった。……男？　それすらわからない。彼の全身を覆うフード付きマントは、顔立ちや体型を隠してしまっている。隙間から見える髪は燃える炎のような赤色で、この魔術師が炎属性であることだけを伝えた。いや、この外見が真実である保証すらない。しかし、それに一体何の意味がある？　全ての属性を操れると言っても、レヴィンの魔力は人並みの領域を出ない。彼に魔法を使われてしまえば、レヴィンには為す術がない。少なくとも、その時のレヴィンにはそう思えた。

そもそも、レティシアは怪しすぎる。ガイスが連れてきた魔術師。もしも彼が操られているとすれば、レティシアは魔法使いの領域に踏み込んでいることになる。魔術師と魔法使いの差異は、力を借りる相手が違うだけ。世界の裏側を支える妖精は力を持っているが、

精霊なら大量に呼び出せるし、リスクも少ない。魔法使いより強い魔術師は、存在する。

「ためらってたりする？　手伝ってあげようか」

レヴィンは首を振った。手伝われると言うことは、つまり、魔術によって操られることに他ならない。それは、大きな苦痛を伴う。

レヴィンは月を仰いでから、弓矢を取り出した。矢をつがえ、弓を引き絞る。

弓では右に出るものがいない。そう言われたことはあったが、今回は外れてほしいと思った。

レヴィンが手を離すと、矢は飛んでいった。魔術の助成を得た矢は、風を切って空を斬る。

「どうして、ウィル王子に当たるように魔術を掛けなかったの？速度を上げれば当たるなんて、思っちゃいないんだろ？」

レヴィンは瞳を閉じた。レティシアの言う通りだ。彼の攻撃はどんなによく見積もっても中の上だったが、避け方だけは素晴らしかった。彼自身が避けるのか、彼の隣にいる女性が結界で防ぐのか。とにかく、自分の矢が外れることを望んだ。何故、そんなことを望むのか、自分でもよくわからなかった。

「結界を破る効果はある。それで十分だ」

「ふぅん。まぁ、結果はどうあれ、君のお仕事は終わりだよ」

レヴィンは振り返った。レティシアの声音が、変わった。

「ぅ……」

腹部に熱い感覚を覚えた。いつの間に……。深々と突き刺さっていたのは、銀製のナイフ。それが、黒衣の影によって、引き抜かれた。

「君の役目は終わり。後は自由にしてもいいよ、陛下」

嫌みったらしくレティシアは手を振った。まるで、犬を追い払うかのように。

レヴィンは息をのんだ。足下が、崩れていく。レティシアが崖の

一部を崩壊させたのだ。とっさに魔術を使ったが、傷のせいで集中できない。
風魔術は、下から突き上げるような風を起こしただけだった。そしてそれは、レティシアからフードを取り去った。美しい赤毛が舞い、素顔が明らかになる。
「お前、……女か」
レヴィンは言ってから、くだらない、と思った。この期に及んで、これか。
レティシアは、その遠ざかってゆく美しい顔に、皮肉な笑みを浮かべた。
「愚かだね。外見にこだわるなんて。ははっ、そうだね。確かにいわゆる魔女だよ、僕は」
レティシアはいったん言葉を切ると、腕を振り下ろした。
「でも、僕は男だよ。まぁさ、一度は村の掟で男と結婚したさ。だけど、気持ち悪かったんだ。僕は女なんかじゃないっ」
たとえ、両親が、王が、神が認めなくてもね。
そう叫んだレティシアの顔が、一瞬、憎悪に燃えた老婆の顔に見えた。しかし、汚れ無き乙女のような、愛らしい顔立ちに戻る。
重力に従って落ちる身体。瞳に映った月に、レティシアの顔が重なった。彼は、泣いていたのだろうか。そう思った瞬間、冷たい水面に身体がぶつかった。
息が、できない……あぁ、ベリルは、自分のことなど気にも掛けず、負けるのだろう。それとも、自分は最後まで、必要ない人間だったのだろうか。
レヴィンは、意識を失った。

２４．ベリル・その４（後書き）

ついにベリルというサブタイトルは終了（のはず）です。……早く続きを書かなければ。入試までには終わらせたいのに。

25. heal your wound

「どうしたらいいのかしら……」
人気のない森の中。そばには幅の広い川が流れていた。この辺りにはもやは全くなく、透き通った夜空が輝く星々を抱いて、頭上に広がっている。静まりかえった空間には、相談すべき人もいない。
本当は城まで転移したかったのだが、アマーリエの魔力では無理だった。とはいえ、落ち着いていれば、こんな意味不明なところではなく、街中に転移することは可能だったはずだ。
「今更、もう一度転移するだけの魔力はないし、自信ないし」
意識を失ったままのウィリアムを見て、アマーリエは固まった。
「炎系統の魔術が得意なら、よかったんだけど……。水系統の魔術は、やっぱりまずいわよね」
活力を与える炎の魔術と、深い癒しを与える水の魔術は、共に医療系の魔術に利用されている。しかし、炎魔術と違い、度を超した水魔術は、死を招いてしまう。そのため、水魔術を使うことは、あまり推奨されてはいない。しかし、アマーリエは炎系統の魔術が苦手だ。それでも、細胞を活性化させ、傷の治癒を早めた方がいいのは誰の目にも明らかだった。
「自信が、ないわ……」
怖くてまだ矢も抜いていない。……毒が塗ってあったら、一体どうするつもりだったのか。しかし、そのおかげか出血はまだ少ない。重要な器官は傷つけなかったようで、ただ気を失ったかのようにウィリアムは眠っていた。
アマーリエは自分の両手を見つめた。さすがに、このまま見殺しにするのは。でも、怖い。自分のせいで殺してしまっては。
震える両手を握ると、伸びた爪が食い込む。
決心しなければならなかった。今はよくても、放っておけば、いずれ、悪くなる。

深く息を吸い込み、アマーリエはウィリアムの胸元に手をやった。慎重に矢を引き抜いて、呪文を唱える。

重要なのは、呪文ではなく、想像（イメージ）。鮮やかな空想は、誰もが認める現実となる。幻想を実現することこそが、魔術師に与えられた能（ちから）力だから。

空想すべきは、炎。周囲を照らし、導くもの。時に全てを飲み込み、浄化し尽くすそれは、生命の象徴にも使われる。

やがて、柔らかな光が二人を照らす。川の水面が、きらきらと輝いた。目覚めだした鳥たちが、歌を紡ぎ始める。

「ここは、一体……」

ぼんやりと霞んでいた目が、ゆっくりと焦点を結ぶ。胸元に、鈍い痛みと、重みを感じた。

「夢じゃない。死んだわけでもなさそうだが……。俺は確か、矢を射られて……結界が破られて……どうなったんだ？」

目の前に広がるのは、平和な光景。空には暢気な雲が浮かび、寝ぼけた太陽が揺らいでいる。

「いや、それはいい。ここはどこだ」

起きあがろうとしたウィリアムは、重さの正体を見た。銀色のその重しは、ゆっくりと顔を上げた。すみれ色の瞳が見開かれ、そして、ゆるやかな微笑みを形作る。

「ウィル。よかった……」

抱きつかれたウィリアムは、少し戸惑ったが、アマーリエの背中に腕を回した。

「ところで、ここは、どこなんだ……」

「……知らない……」
どこか決まり悪そうに答えるアマーリエに、ウィリアムは笑った。むっとしたアマーリエがウィリアムから離れようとして、眼と眼があった。そして、そのまま沈黙が下りる。
アマーリエの唇が、何かを紡いだ。ウィリアムが聞き返そうとした時、彼の唇はふさがれた。触れあったのは一瞬だった。呆然としたウィリアムの隙をついて、アマーリエは彼の腕から逃れた。慌てて起きあがったウィリアムは、アマーリエを掴もうと腕を伸ばしたが、それは宙を掻いた。森の中に消えるアマーリエ。
「あんな無茶苦茶に走ったら、迷うよな……」
立ち上がると、後を追った。よくわからないが、そうした方がいいような気がした。

25．heal your wound（後書き）

サブタイトルが、決まらない。ということで、合ってるのかよくわからない英語を使ってみました。英作文は綴りの間違いで点を引かれるタイプなので、一応大丈夫だと思います。

さて、もうそろそろ強引にくっつけてしまえ、と脳内の人が言っておりますので、その通りにしようかと思います。どうなるかなぁ……。

26．遭遇

ウィリアムは立ち止まった。森は案外狭く、すぐに出られたのだが。
「ウィル。探したんだぞ」
肩を叩いてきたのは、ルーカスだった。
「転移魔法でお前らが消えた後……」
転移魔法？　こんな近場に……。嘘だろう。
目の前に広がるのは、野営地だった。つまり、あの平原（？）から大した距離はない。
「アマーリエは？」
話聞いてなかったか……と、ルーカスはため息をついて、一つの天幕を指し示した。
「つか、なんかあったわけ」
「わからない」
わからないってどういうことだ、と尋ねたそうな顔をしているルーカスを放って、ウィリアムは歩き出そうとした。その腕をルーカスは掴んで止めた。
「別にいいんだけどさ、着替えた方がいいと思うんだけどなぁ」
「それは……そうだろうな」

ウィリアムが示された天幕に入った頃には、アマーリエはすでにいなかった。代わりにいたのは、ゲオルグとアーガルドだった。
「殿下、矢を射られたと聞きましたが」
「姫がなおしたんですよね、どうなったんです？」
ウィリアムはどうしようか迷ったが、そこに腰を下ろした。
「それはいいんだ。結局、どうなったんだ？」

そう尋ねると、二人は顔を見合わせた。
「軍を指揮していたガイスという魔法使いが、突然降伏を申しだしてきました。しかし、王太后が断固として降伏しようとしなかったため、捕らえました。彼女は後日、形式に従って処刑することになるでしょうな」
「というか、ベリル王が見つからない。どこに消えたんだか……。実権は握っていなかったようですが、あの武術大会で優勝した奴が城にこもっているとは思えないんですよね」
ウィリアムは首をかしげた。
「それって、どういうことだ？」
尋ねると、アーガルドが菓子を口に放り込みながら答えた。
「なんでも、レティシアとかいう魔術師に連れ去られたとか、なんとか。しかし、誰に聞いても、レティシアについての情報がつかめないんですよ。年齢不詳っていうのはよくある話ですが、性別まで不明なのは珍しいですね。性別を変えるのはあっても、仮の性すら悟られないのは難しいですから」
「一応、探しておきましょうか。たとえ、名ばかりの王だとしても、居た方が話が早いですからな」
ウィリアムは頷いた。
「それで、アマーリエはどこに」
「姫？　知らないけど」
「姫……？」
不審に思って問い返すと、アーガルドは慌てて首を振った。
「深い意味はないから。あはは」
空々しい笑い声。思いっきり何かを隠していたが、ゲオルグが何も言わないので、追及しないことにした。それよりも、アマーリエにあって話したいことがあった。
ウィリアムは天幕の外へ出ると、ため息をついた。そして、当てもなく歩き出す。
なんだか不思議な気分だった。最近はずっと一緒にいたので、ア

マーリエが隣にいないのが、とても不自然な気がした。

ぼんやりと歩き続けていると、あの川岸に来ていた。不意に、唇の感触を思い出し、どきりとする。頭を振って、その感触を払い落とす。

「しばらく、歩こう」

ため息と共にそうつぶやくと、川に沿って歩き出した。上流の方へ向かう。しばらくすると、川の中に岩などが目立つようになり、面白い風景を創り上げていた。そして、その光景の中に、何か白いものがあった。

「あれは……」

よく見ようと目をこらして、ウィリアムは息をのんだ。

それは、人間の腕だった。よく見れば、その先に胴体が続いている。

バラバラ死体かと思った……死体？

ウィリアムは駈け寄って、それを川から引き上げた。そして、顔に手をかざした。

「息がある。生きているのか」

豪奢な服の、脇腹の辺りが真っ赤に染まっていた。深い傷だ。いつ負ったのかは知らないが、今まで息があったのが不思議な程の。

顔を見ると、それは、あの武術大会で見た、彼のもの。夜闇のように黒い髪に、端整な顔立ち。ベリル王と称される、彼の名は確か……。

「レヴィン・キーヌ・アーマルド……だったか」

そうつぶやいた時、レヴィンの眼がゆっくりと開いた。深海のような深い青の瞳が、ウィリアムを映す。

「ウィリアム殿下。お久しぶりです……」

何故か、泣きそうな笑みを浮かべた彼は、起きあがろうとした。

「ちょっと待て、傷が……嘘だろ……」
あの傷は、すでにふさがり始めていた。驚異の治癒能力……というのだろうか。
「私は、シリアの血を引いていますから」
ウィリアムはすぐに意味がわからず、眼を瞬かせた。その様子を見たレヴィンは苦笑した。
「特異体質です。……私は、貴方に謝らなければならないことがあります」
「は？」
まるで死期を悟った病人のように、澄んだ気配を纏ったレヴィンは頷いた。
「貴方に矢を射たのは私です」

２６．遭遇（後書き）

あんまり長くなるのは、好きではないので、切ってみました。何故かアマーリエが出てきません。

本当は出すつもりだったのに……。

27．決断

「それは、どういうことなんだ」
ウィリアムが尋ねると、レヴィンは小さく首をかしげた。何故、聞き返されるのかがわからない。そういった感じだ。
「そのままの意味ですが」
結界を破って飛んできた矢。それは、魔術師が射たということの証明でもある。そして、シリアの血を引くものは、大概、魔力を持っている。しかし、目の前の青年が射たという証拠にはならない。
「レティシアに連れ去られたと聞いたが」
「えぇ。しかし、弓を引いたのは私です。魔術で操られたわけではありません」
自分の目をしっかり見つめ返してくるレヴィンが嘘を付いているとは思えなかったが、あの矢を放った人間だとは、ウィリアムには思えなかった。少なくとも、自発的にそうしたとは。そして、同時に、彼が自分に殺されたがっているような気がした。
「どうしてだ……」
「え？」
「どうして、死にたがるんだ」
レヴィンは眼を瞬かせ、そして、小さく笑った。
「別に、死にたがっているわけではないのですが。でも、生きていたいとも思いませんね」
「……」
「敗戦国の王は処刑されるのが筋です。たとえ、それが形式的なものであろうとなかろうと。そうしなければ、落ち着かないでしょう？　どんな戦であれ、死人のでない戦など無いのですから」
ウィリアムはなんだかよくわからないが、腹が立ってきた。レヴィンの話し方は、奇妙な説得力を持っていたが、ウィリアムの心のどこかがそれを否定している。

間違っているのだ。そう、感じた。
「……お前は行方不明者だ。そのまま、行方不明のままでいろ」
ウィリアムは、レヴィンから目をそらさずにそう言った。レヴィンは呆気にとられたような顔をした。
「どうしてです？」
「理由なんて無い。ただ、俺が気に入らないだけだ」
「でも」
「その回復力なら、もう傷は治ったんだろ。……アーマルドの名を捨てて、好きなところへ行くがいい」
ウィリアムは、突き放すように言った。レヴィンを殺す必要性など、そんな物わからない。
「でも、国に戻って、また、戦を起こすかもしれませんよ」
自嘲気味に紡がれた言葉を、ウィリアムは鼻で笑った。
「どうせ、そんなことはしないだろう。死ぬ気がなくなったら、いつでも来るがいいさ。ただのレヴィンになら会ってやる」
そして、返事も聞かずにウィリアムは立ち上がった。来た道を引き返しながら、背後からの声を聞いた。振り返ったりはせず、ただ、歩いていった。
その後、レヴィンがどうなったのかは知らない。

ふと我に返ると、随分下流まで来てしまったらしく、川幅は広がり、流れも穏やかになっていた。
「……いい加減、戻らないと。アマーリエはどこ……」
言いかけて、木陰にアマーリエの姿を見つけ、ウィリアムは目を見開いた。
緑の葉が、アマーリエの白い肌に複雑な陰影を付けている。計算され尽くしたかのような構図に、目を奪われる。
ウィリアムはぼんやりと近付いていった。まるで、あの日のよう

だ。心の片隅でそう思った。
「アマーリエ？」
アマーリエの前に膝をつき、そう呼びかける。アマーリエは、すぐに目を覚ました。見開かれた瞳には、驚きの色が浮かんでいる。
「どうして、不可視の術をかけていたのに……」
いいえ、そんなことが言いたいのではないわ。
そんなことを言いながら逃げ出そうとするアマーリエの腕を、ウィリアムは掴んだ。
「離して」
ウィリアムは離さなかった。……今、手を離せば、二度と会えなくなるような気がした。
「どうして、逃げようとするんだ」
「そんなの、わからないわよ」
アマーリエの瞳に浮かぶ涙に、ウィリアムは言葉を失った。
透明な雫が、頬を伝う。
「わからないの……」
ウィリアムはアマーリエを抱きしめると、その頬に口付けた。
アマーリエはウィリアムを睨み付けた。
「どうして、そんなことをするの」
その瞳に浮かぶのは失望か、それとも……？
アマーリエはウィリアムが腕をゆるめると立ち上がり、駆け出そうとした。ウィリアムはその寸前で、アマーリエの腕を再び掴んだ。
「離してよ」
目と目があった。
「アマーリエ」
ウィリアムが呼びかけた時、アマーリエは手を振り払った。そして、ウィリアムに向き直る。
「どうして、私ばっかりが好きにならなくちゃいけないの」
その声が、耳を打った。ウィリアムはそのまま駆け出そうとするアマーリエを捕まえた。腕の中で抵抗するアマーリエを見て、小さ

く笑みをこぼれた。
「好きだよ。……多分」
「多分って、何よ……」
アマーリエはもう抵抗しなかった。
そっと閉じられた瞳から、涙がこぼれた。
そして、唇が重なろうとした時、馬の足音が聞こえた。
二人はぱっと離れて、音のした方を振り返った。

27．決断（後書き）

相変わらずサブタイトルが謎です。……合ってないけど、告白、とかでもないし……微妙ですね。

ウィリアムの顔が全く浮かびません。年齢も二十代としかわかってないです。どうやら、男性の理想像は、私の中にはないようです。だから、口調が変わるのかな……。

28．衝撃

馬に乗った兵士はウィリアムを見つけると、止まった。馬から降りて、こちらへ歩いてくる。
慌てた様子の兵士を見て、ウィリアムは不審に思った。
「何が、起こったんだ」
ウィリアムの問いかけに、兵士は答えた。
「リチャード皇太子殿下が、お亡くなりになりました」
「は？」
ウィリアムは冗談だと思った。けれど、アマーリエの様子を見て、違うのだ、とわかった。
「兄上が……亡くなった？」
唇からこぼれた言葉が、他人の声のように聞こえた。全身から力が抜けていくかのような、幻覚。
兵士が無言で頷く。
「嘘だろ……」
これが現実だとは、認めたくなかった。他人事だと、そう、思いたかった。
「殿下は、胸を患っていらっしゃったから」
アマーリエの冷静な言葉に、いらいらした。他人事みたいに言わないで欲しい。……じゃあ、一体、どうして欲しいんだ？
「何で、誰も教えてくれなかったんだ？」
ウィリアムが言うと、アマーリエは少し俯いた。
「殿下が、それをお望みだったからよ。……陛下は、貴方が知っていると思いこんでいらっしゃったみたいだけど」
声が遠くに聞こえた。もう、聞きたくないと、思った。そのくせ、誰かにすがりついて、泣き出してしまいたいような気がした。
……いや、違う。
心が冷えてゆくのを、感じたような気がした。

「兄上が、その、病気だったと、知っていたのか？」
戻ってからルーカスに尋ねると、肯定が返ってきた。ルーカスが何かを言おうとしたが、ウィリアムはそれを遮った。何を言われるか、想像が付いたからだ。
「事後処理は？」
「それは、すぐに終わると思う。……明後日には、王都（ソフィア）に向けて出発できるかと」
ルーカスはそこで一旦言葉を切った。心配そうな顔色で、ウィリアムを見る。
「もちろん、ウィルが望むなら、今すぐにでも」
ウィリアムは首を振った。
「いい。変に気遣わないでくれ」
それが義務だからだ。命を落としたものもいるのに、自分だけ勝手な行動をするわけにはいかない。
「大丈夫か？」
立ち去り際に掛けられた声に、ウィリアムは答えなかった。

「何で、付いてくるんだ」
ウィリアムはアマーリエに問いかけた。一人にして欲しいと思ったのだ。
「私は、護衛だもの」
アマーリエはそう言って、じっと見つめ返してきた。
強い意志を持った眼差しに、ドキリとする。
「護衛って、もう、終わっただろ」
「……まだ、終わってないわ」

アマーリエが近付いてくるのに、ウィリアムは動けなかった。
「今の貴方を一人にしておくのは、不安だわ」
そう言って、抱きついてくる。顔が見えない。
「アマーリエ？」
アマーリエは顔を上げた。
「どうして、感情を抑えようとするの？　それは、とても危険なことなのに」
何が？　誰が、何を抑えようとしていると言うのだろう。
「さぁ、見せて」
アマーリエがそう言った瞬間、自分の中の何かが、壊れたような気がした。音を立てて崩れ去ったそれは、一体、何だったのか。
目頭が熱くなって、こぼれ落ちたのは。
それが、一種の魔術だったと気付くまでに、時間はかからなかった。それでも、気付いた時には、それを振り解く気を無くしていた。
きっと、必要なことだったのだ。

28．衝撃（後書き）

この辺で一区切りでしょうか（↑どこが）。

最近もそうですが、受験勉強がやばくなってきたので、定期的に更新ができません。でも、この後が書きたいところなので、できる限り頑張ります。

頑張ってセンター九割目指すぞ（高望み）。

29．帰城

結局、ウィリアムは皆より一足早く王都・ソフィアに戻ることになった。さすがに、王太子の葬儀に弟が出席しないのはまずかろう、と言うことである。

他の者達はいろいろやることが残っているので、ウィリアムについてきたのはアマーリエとルーカスだけだ。だから、アマーリエがウィリアムから逃げずに話をするようになったのに気付けたのはルーカスだけだった。

ウィリアム達が喪に服している城に入ったのは、報せから数日後のことだった。

ステノブルクでは、というよりもマーヴェル皇国のしきたりで、遺体は一週間ほど寺院に納められ、それから盛大に式を行う。葬式の時に悲しむと、故人の魂が地上に縛り付けられ、新たな世界に旅立てないから、一種の祭りのようにさえ見える。遺体を燃やすことは浄化にも繋がることから西大陸（アールシリア）ではよくやられるそうだが、ここ、東大陸（グランシア）では葬儀の後はそのまま土に埋める。亡くなった王妃の顔を見ようと、夜な夜な墓場を掘り返し、腐っていくその顔に絶望した王が昔いたという、本当か嘘かよくわからない伝説も残っている。……死者の肉を食べる人もいるらしいが、それはどこの国でも例外だ。飢餓以外での食人は許されない禁忌である。

ともかく、リチャードの遺体も教会に安置されていた。礼拝堂には、妻であるマティルダがこもっている。神が現在いないことはわ

かっていても、祈りを捧げたい人間のために教会は存在する。神がいる時にはその目を自らに向かせない為に、神がいない時には“冬”を早く終わらせる為に。決して人を救うことはないと理性ではわかっていながらも、諦めきれない人々によって常に満員である教会は、マティルダの為にがらんとしていた。

ウィリアムはそっと礼拝堂の中に足を踏み入れた。

ステンドグラスの前で跪く義姉の姿に、胸が痛む。

偶像を許さない、というよりも神の姿が定まらないが故に閑散とした台の上には、揺らめく炎を纏った蝋燭と水を満たした聖杯だけが置かれている。暑い季節の筈なのに、礼拝堂の中は何処か寒々しい。暗くよどんだ空気が、どろどろと鎮座している。

「姉上」

声を掛けると、マティルダは振り向いた。

穏やかに澄んだ瞳からは何の感情も読み取れない。しかし、柔らかく微笑んだその顔は、いつも通りの義姉だった。

「お帰りなさい。ウィル」

落ち着いた声音でそう告げられて、ウィリアムは何と言えばいいのかわからなくなった。何を言っても、目の前にいる誇り高い女性を冒涜してしまうような気がした。

「貴方が無事で、よかったわ。きっと、リチャードも喜んでいるはずよ」

そうマティルダは言うと、音もなく立ち上がった。

「さぁ。お祈りはもう十分。これ以上、こんなしけた場所にいろなんて言わないでしょう？　支度に取りかからなくちゃ」

未練の色も見せずにマティルダは立ちすくむウィリアムとすれ違った。彼女の頬には涙の筋が残っていたが、自分にできることなど何もなかった。だから、ただ、小さく頭を下げて、その場所を離れた。

なんとなく、祈る資格が自分にはないような気がした。

それから、父の所へ行った。
一応、喪に服しているらしき行動を取っているようだが、父からは悲しみの感情を読み取ることはできなかった。むしろ、起こるべきことが起こった。そんな感じがした。
ひょっとしたら、この人は全てを前もって知っていたのかもしれない。
ウィリアムは不意にそんな事を思った。そうでなければ、母の死にこだわる父がこんなにあっさりと息子の死を受け止められるのだろうか。それとも、兄の死が前々から予想されていた事態だったからだろうか。
「お疲れ様。僕もそれでいいと思うよ」
オーウェンは報告に対し、ちらりと顔を上げてそう言った。
リチャードに丸投げしていた分の仕事をこなすことになったからか、オーウェンは真面目に書類に向かっていた。兄がいた頃には、見られなかった光景だ。なにしろ、ウィリアムがそういう事に興味を持ちだした頃には既に、兄が半分ほど受け持たされていたからだ。だから、いろんな人が父を褒めるのを聞いて疑問に思っていたが、ペンの進むスピードから、その評価が嘘ではないと知って、多少ショックを覚えた。
「兄上は」
「リチャードも頑張ってくれたよね。今まで生きていてくれただけでも、奇跡みたいなものだったしね」
何処か遠い目をして告げられたその言葉に、ウィリアムは違和感を覚えた。
「じゃあ、どうして仕事を押しつけたんですか。それが、兄上の身体に負担を掛けるって、わかっていたんでしょ」
ウィリアムが責めるような口調で言うと、オーウェンは少しだけ寂しそうな顔をした。

「……あの子がそれを望んだからね」
「え？」
問いただそうとした時、オーウェンが手を振った。
「手伝う気がないなら、邪魔だからさっさと出て行きなさい」
「でも」
オーウェンは顔を上げて、ウィリアムを見据えた。
「僕は、君の生き方には必要以上に口を挟もうとは思わない。僕みたいな奴の考えなんて、気にする必要もない。でも、やるべき事はきちんとしなさい。何が求められているかは、わかっているよね？」
それは、確認の形を取った、命令だった。

２９．帰城（後書き）

また、いらない話が増えたようで……。

経済学部なら……などと言われれ（この学部にだけは行きたくないのです）、数学や物理とお友達になりたくて仕方のない人類です。

更新がものすごい不定期なのですが、しばらく更新できない気がします。……文系選んでたら、得意な教科だけで勝負できたと思うと、挫けそうです。

30. Feel my way

リチャードの葬儀が終わり、ウィリアムには王太子の位が授けられることになった。肩書きが増えることによって、やらなければいけないことが増えた。そして、アマーリエは南に帰る支度を始めていた。

「私、明後日には帰ろうと思うの」
アマーリエは静かにそう言った。ウィリアムは、引き留めたい、と思ったが、気の利いた台詞も出てこないので黙っていた。
中天には青白い月が浮かんでいて、周りにはぼんやりと暈が出ている。風もなく、気味が悪いほどに静かだった。
「……引き留めないのね」
そのつぶやきに含まれた、微かな寂しさ。何処か諦めのようなものも感じさせる響きに、ドキリとした。
「アマーリエ」
名前を呼ぶと、アマーリエは顔を上げた。
窓を開け放した、バルコニーに風が吹く。アマーリエの銀の髪がそれになびいた。すみれ色の瞳がウィリアムの姿を映している。
最近は少しも気にならなくなっていた、アマーリエの腕に巻き付いている赤いリボンが、何故か気になった。それは、風に揺れることもなく、アマーリエの動きにのみ従う。
ウィリアムはそっと腕を伸ばし、アマーリエを抱きしめた。アマーリエは抵抗せず、ウィリアムの背中に腕を回した。
「こういう時って、何か言うものじゃないの？」
アマーリエは、ウィリアムの胸に顔を埋めたまま言った。ウィリアムは少し考えてから、アマーリエから少し離れ、顔を覗き込む。

「好きだよ、アマリー」
アマーリエはつんと、顔をそらした。
「愛称で呼ぶ権利は与えてないわよ」
けれど、その口調とは裏腹に、どこか頬が赤い。
「じゃあ、その権利をくれないか」
そう言ってから、ウィリアムは内心、あれ？　と思った。何処かで聞いた、いや、読んだ覚えがあるような……。
アマーリエの顔がみるみる赤くなる。
「それ……本気？　私は、明後日には帰るのよ」
ウィリアムはためらいながらも頷いた。頭の中で、誰かが、もっとよく考えろ、と言ってきているような気がした。何かやらかしてしまった気がするのは、どうしてだろう？
「もっと、そばにいてほしい」
本心から言っているつもりだが、どうやら、違う意味を含んでいるらしい。アマーリエは何か言いたそうな瞳を向けてきた。
「……いいわよ。それが、本気なら」
小さなため息と共に返ってきた言葉。何か含みがあるような、と思いつつ頷いた。
ウィリアムはアマーリエを抱き上げた。そして、唇を重ねる。

夜風は、赤いリボンを、揺らした。

30．Feel my way（後書き）

サブタイトルは、イディオム集を信じるなら、「手探りで進む」らしいです。myでよかったのかな？

今回短いのは、つなぎだからです。次回も短め？　です。

31．過去

世界が反転して、控えめな装飾の天井が見えた。体の下に感じるのは、柔らかな寝具。頭の横に、ウィリアムの腕がある。アマーリエは、愛おしさと共に、胸が不自然にざわめくのを感じた。……この先に何があるのかもわかっている。でも、それに対する不安とは、少し違う気がする。無意識に、シーツを掴む。

「大丈夫？」

気遣わしげなウィリアムの視線に、アマーリエは微笑もうとした。しかし、その手が頬に触れた瞬間、その笑みは凍り付いた。

蘇るのは、過去の残像。

目の前にいる男の口元には、下衆（げす）びた笑みが浮かんでいる。無骨な手が、頬に触れた。

「ご機嫌はいかがかな。家出中の皇女様」

アマーリエは声を上げようとした。しかし、こわばった筋肉はうまく動かない。

「悪いな。舌でも噛まれると面倒なんでな」

別の男が言った。手足を動かそうとして、戒めに気付く。そして、自分が赤いリボンしか身に纏っていないことを知る。辛うじて秘所を覆うように巻き付けられたそれは、ラッピングのようでもある。幾人もの男に素肌を見られる羞恥に、どうしてよいのかわからない。

「俺の死んだ娘は赤いリボンが好きだった。一糸纏わぬってやつより、ましだろう」

……どうして、こんなことを。私は、何もしていないのに。

「お前の母親のせいで娘は死んだ。その気持ちがわかるか」

……そんなこと、知らない。皇位を継がないから、政治について

は深く教えてもらえなかったから。お母様が何をしているかなんて、誰も教えてはくれない。
「こんな事しても意味はないんだろうが、ただ殺すんじゃ、納得がいかない。娘がどんな思いで死んでいったか……」
冷静な瞳をしていた男に、狂気が宿っていく。アマーリエを見ている男達は、総じてみすぼらしい格好だった。アマーリエのよく見知った、華やかな宮中で礼服を身に纏い、恭しく接してくる男とは違う。
……こんな世界が、あったなんて、知らなかったの……
無骨な指が、身体の上を滑る。そのおぞましさ、身を貫かれる痛み。
……こんなの、嫌。
思った時、目の前に鮮血が散った。頬にべったりと粘つく液体が降りかかった。
……え？
気が付けば、目の前の男達は、皆死んでいた、首を斬られて。
左腕に違和感を感じて目をやると、血に染まったリボンが、這い登っていた。
「や、た、助けて……」
やっと、涙がこぼれた。

「どうして、今まで忘れていたの……」
無意識に、いや、アマーリエは何も見ていなかった。開ききった瞳の焦点は虚空にあり、呼吸の仕方すら忘れてしまったよう。
「アマーリエ？」
ウィリアムが身を起こし、心配そうに声を掛けた。
「本当に、大丈夫か」
そう、口を開いた時、赤いリボンがウィリアムの頬をかすめた。

血が微かににじむ。
「どう、したんだ」
「近づか、ないで……」
アマーリエはウィリアムを押しのけると、かけだした。
「アマーリエ」
伸ばされた腕は、宙を掻いた。

31．過去（後書き）

……あんまり書くと怒られそうなのでこんな感じで。未経験者の妄想ですので、つっこまないでください。

32．相談

アマーリエは無我夢中で走っていた。
わからない。どうすればいい？
混乱していた。いろいろな感情が、ぐちゃぐちゃに混ざり合っている。

「アマーリエ？」
アマーリエが走ってくるのを見たマティルダは、呆けたようにつぶやいた。そして、次の瞬間、ぶつかった。
「痛た……大丈夫？」
起きあがったマティルダが見たのは、暴れ回る赤いリボンに囲まれた、アマーリエだった。
「アマーリエ」
呼びかけても、反応がない。何の感情もこもっていない暗い瞳を見た時、マティルダははっとした。
「もう。ウィルは何をしたのよ」
マティルダは皮膚やドレスがリボンに傷つけられることも気にせず、アマーリエを抱きしめた。
「大丈夫よ、アマリー。もう、誰もいないわ」
しばらくして、リボンが力を失い、地に落ちた。胸元に顔を押しつけて泣き出したアマーリエを、マティルダは黙って抱いていた。

冷たいタオルを目元に当てて、アマーリエが椅子に座っていると、目の前にコップが置かれた。暖かい湯気が立ち上るそれは、ほのか

な蜂蜜の香りを漂わせている。
「少しは、落ち着いた？」
笑いかけてきたマティルダの顔や手に小さな傷を見つけ、アマーリエは唇を噛んだ。
「ごめんなさい……」
「いいのよ、気にしなくて。このくらい、すぐに治るわ。ちょっと痛いけどね。……でも、落ち着いていたから、折り合いが付いたのかと思っていたわ」
頭をなでて、隣に座ったマティルダからアマーリエは目をそらした。
「ずっと、忘れていたの。そういうことがあったって事しか、覚えていなかったの」
「そう。でも、過去と向き合ういい機会かもね。このままじゃ駄目だって、わかっているんでしょう？」
アマーリエは小さく頷いた。それを見たマティルダは、戸棚から一通の手紙を取り出した。
「これは、貴女のお母様からの手紙よ。陛下が言い出しあぐねていたみたいだから預かったんだけど、どうする？　嫌なら、別に読まなくてもいいのよ」
アマーリエは手紙とマティルダの顔を交互に見て、手紙に手を伸ばした。

「これで、よかったのかしら」
マティルダは窓から外を見た。新月だから、星しか見えない。その上、その星の光すら弱いようだ。もうすぐ朝日が昇るだろう。
アマーリエが捜索の兵士に発見された時、彼女は男達の血にまみれ、意識を失っていたという。城に運ばれ、娘を心配した女帝がやってきた。娘の左腕に蠢くリボンを見た女帝はおびえて娘を罵った。

運悪く、アマーリエはその時意識を取り戻してしまった。そして、見かねた父親に連れ出されるまで、薄暗い部屋に閉じこめられ、実の母親から暴力を受けていたらしい。

「あんな手紙、無視して捨てた方がよかったような気がしてきたわ……」

身代わりの少女に気付き、女帝は娘を捜し出したらしい。気味悪いなら放って置けばいいのに。でも、アマーリエの心の傷には、母親が深く関わっている。母親との関係をどうにかしない限り、アマーリエは救われない。南で独身を貫くなら、それでもよかったのだろうが、ウィリアムを愛してしまったのだ。もしもアマーリエが結ばれることを望むなら、過去の傷と向き合うしかない。

「あら。そういえれば、ウィルはアマーリエの素性にまだ気が付いてないんだったっけ？」

マティルダは、うすうすは感づいているの、よね？　と胸の中で付け足した。

窓に、風に翻弄された落ち葉がこつんと当たった。

「しまった。すっかり忘れていたじゃないの」

とある薬草の夜露、それも新月の晩にしか手に入らないやつを取りにいくつもりだったのに。しかも、朝日に当たった途端に薬効は消え去るとか。

マティルダは拳を振り下ろした。最高の毒薬になると言う夜露。毒物を愛する身としてはかなりの失態だ。

「もうっ。一年に一回しかチャンスはないのよ、馬鹿」

その時ふと、旅に出るのもいいかもしれないと思った。この城にとどまる理由だった彼はもういない。国に帰るも帰らないも自由だと言われた。

「でも、悔しいなぁ」

うっすらと白み始めた空が、にやりと意地の悪い笑みを浮かべた。

32．相談（後書き）

この話、作者の知らないところでかなり時間が過ぎているようです。マティルダ、立ち直るの早すぎなような気がします。

こうして舞台はマーヴェル皇国へ。……続き、書いてないけど。

33．昔話

ウィリアムはぼんやりと書類を眺めていた。
文章を目で追ってはいるが、内容が全く頭に入ってこない。必然的に、同じ行を何度も繰り返して読むハメになっている。
「何やってんだ、ウィル」
笑い混じりの声が降ってきて、ウィリアムははっとしたように顔を上げた。そして、手にしたペンから滴り落ちたインクが書類にシミを作っているのを見て、うんざりした。
「ちゃんと、書き直せよ」
そこまで言って、ルーカスは口を閉じた。ウィリアムは怪訝に思って首をかしげる。
「どうしたんだ？」
「いや？　そういえれば、アマーリエ嬢は？　最近、見ないけど」
「……知らない」
本当に知らなかった。あの夜から、アマーリエは幻だったかのように消えてしまったのだ。部屋に荷物は残されていなかった。南に帰ったと言うことなのかもしれないが、ウィリアムの中の何かが、それは違うのだと告げていた。
「あ、っそ。ま、いいけど。俺、昼喰ってくるわ」
ルーカスはそれだけ言うと、止める暇もなく出ていった。
「少しぐらい、手伝おうという気はないのか」
一人取り残されたウィリアムは、書類の山を見て顔をしかめた。

「久しぶりだなぁ。こうして我が息子と昼食を共にするとは」
「……昨日も食べたような気が……」
なんだか楽しそうな父王（オーウェン）の姿を見て、ウィリアムはため息をつい

た。それをオーウェンは聞き逃さなかった。
「だめだよ。ため息をつくと、幸せが逃げるんだ」
どこの迷信だよ。
ウィリアムは舌打ちでもしたいような気分になったが、相手が国王なので押し隠す。
「あの、父上。アマーリエがどうしたか、知りませんか」
そう尋ねると、答えはあっさりと返ってきた。
「マーヴェルだよ。エヴァ・ラトゥーサの……なんて言ったっけ、皇城に行くつもりだと言っていたよ。何年ぶりかな、母親に会いに行くんだって」
世間話でもするような気軽さで、オーウェンはにこやかに言った。
「……母親？」
「ん？　フリーデルト女皇のこと……ってまさか、気付いてなかったわけ、ないよね？」
ウィリアムは首をかしげた。理解することを、拒否しているようだ。
「つまり、彼女はかの有名な、“血の皇女（ブラッディ・プリンセス）”だって事だよ。ローツェルは父方の姓だね。正式名は、アマーリエ・カイン・シュレイツ。皇位継承権第二位の歴としたお姫様だよ。まさか、本当に手を出しちゃったりしたの？」
ウィリアムは黙った。“血の皇女”について聞いてきた時の行動の意味がやっとわかったような気がした。
「でも、何で“血の皇女”なんです？　誘拐された先で魔力が暴走して、周囲の男達の血にまみれた姿からだって、聞いたことはありません。でも、そんなに簡単には、魔力は暴走しませんよね？」
ウィリアムの問いかけに、オーウェンは試すような笑みを浮かべた。
「それを、僕が知っていると思うのかい？　その時、僕はこの国にいたのに」
ウィリアムは頷いた。何故だか、絶対の自信があった。

「僕が教えたなんて、言わないでよ」
まるで子供のようにそんなことを言うと、オーウェンは遠い目をした。

マーヴェル皇国の皇家・シュレイツ家に特有の、銀の髪にすみれ色の瞳を持つ皇女が生まれた時、国中が喜んだ。翌年、弟が生まれ、彼女が皇位を継ぐ可能性は低くなったけど、誰にでも笑いかける皇女は誰からも愛されていた。しかし、その辺りから政治が乱れるようになっていた。思えば、その前から女皇が少しずつ乱していったのが表面に現れだした、ということだったのだろう。それは、じわじわと農民や貧民を苦しめた。一方皇女は、病弱な弟の代わりに国を守ろうと剣を学び、学問を習うようになった。過保護な女皇は、彼女が城を出ることは決して許さなかったが、代わりに、自分が与えられるものは情報以外何でも与えた。そして、彼女はその美貌と武芸の腕でますます多くの人間に愛されるようになった。だが、農民や貧民は、つまり、首都の外の人間は追いつめられていたんだ。そして、好奇心旺盛な皇女は、母親の言いつけも守らず、城外へ出てしまった。きらびやかな貴族の世界しか知らない彼女に、彼らは襲いかかった。そこで純潔を奪われ、それをきっかけに異能が発現した。……警邏兵が発見した時、彼女は男達の血にまみれ、感情のない目をしていたらしい。城に帰った皇女を見た女皇は何故か、それが魔術の暴走の結果ではないことを見抜いてしまった。血に染め上げられた赤黒いリボンが皇女の左腕を這い回り、近寄ったものは誰彼かまわず斬りつけられた。女皇は皇女を一室に閉じこめ、まぁ、傷つけたんだ。すぐに女皇の夫が皇女を助け出したが、その頃には皇女は気が狂っていた。だから、記憶を封じて、南に送られたんだ。

「こんなもんかな？」
「……」
あくまで明るく話すオーウェンに、ウィリアムはぞっとした。
「それでも、君は、彼女を迎えに行けるかい？」
だから、父が何を言ったのか、よくわからなかった。でも、無意識に頷いていた。
「じゃ、できるだけ早く帰ってくるように。僕、こんな面倒な仕事は嫌いなんだ」

33．昔話（後書き）

まぁ、光と闇があると言うことで……。

34．エヴァ・ラトゥーサ

ウィリアムは目の前にそびえる大門を見上げた。白っぽい石でできたそれは、数々の彫刻に彩られている。優美なデザインでありながら、荘厳な威圧感を与える。左右には、街を守る城壁が伸びていた。

「そんなところに突っ立っていると、邪魔になるわよ、お兄さん」

背後から声をかけられ、すみません、と振り返る。

乗馬服を着た、上品な老婦人だ。着ているものからして、身分は高いようだ。……マーヴェルでは貴婦人の乗馬は好まないと聞くし、貴族ではないのかもしれない。

「ひょっとして、初めてかしら」

「いえ。三年前に、少しだけ」

「そう。この街は、旅人には向かないしね。行く当てはあるの？」

老婦人は馬の手綱を引きながら、ウィリアムに問いかけた。ウィリアムは少し皇城の方角を見てから、頷いた。老婦人は、ウィリアムが持っているケースを見てから微笑んだ。

「なるほど。舞踏会ね。アマーリエ皇女が今年は出席なさるとかで、話題になってるわ。その格好からして、奏者として呼ばれたのかしら？　でも、本当にその楽器を弾けるのかしらね」

不思議な笑みだった。まるで、何もかもが見透かされているような。ウィリアムが黙っていると、老婦人はそっと息を吐いた。

「さて、そんなに警備は甘くないのよ、お兄さん。一体、どうするつもりかしら？」

ウィリアムは首をかしげた。老婦人はその様子を見て、楽しそうに笑った。

「そうだわ、馬を走らせたら、従者が付いて来られなかったみたいで、困っているの。よかったら私の従者として付いてこない？　ウィリアム」

意味深な笑みを浮かべて、名前を呼ぶ。
「どうして、名前を」
呆気にとられるウィリアムに、老婦人は手を差し出した。
「私は元グリンデル辺境伯ラティエル。何なら、お婆様でも結構よ」
「グリンデル伯……」
というと、孤児だった父親（オーウェン）を引き取ったという、あの奇特な女伯爵だろうか。皇王からの信任も厚かったが、夫が亡くなってから爵位を子供に譲り、領地に引きこもっているという？
「あれ、でも、ラツィエルじゃないんですか？」
たしか、アマーリエはそう呼んでいたが。
「戸籍にはラツィエルと載っているわね。でも、ラティエルと呼ばれる方が好きなのよ」
「そう、ですか。でも、どうしてこんな所に」
「こんな所とは結構な言いぐさね。こんな街でも、私の生きてきた場所なんだから。……でも、アマーリエには息苦しかったでしょうね。南に逃げたって言うから、安心していたのに。あの子は正直者だから戻ってきてしまった」
老婦人、ラティエルは遠い目をしながら言った。
「アマーリエを、知っているんですか」
「もちろんよ。あの子が乗馬を嫌がる原因を作ったのは私だもの」
茶目っ気たっぷりに言うと、ふと、真剣な表情になった。
「ねぇ、あなたはアマーリエを幸せにできるかしら」
「……」
黙っているウィリアムを見て、ラティエルは空色の瞳を細めた。
「少なくとも、オーウェンに比べれば、誠実ね」
そんなつぶやきに、ウィリアムは、え？　と声を上げた。けれど、それは黙殺される。
「私があなたを手伝ってあげましょう。その代わり、失敗は許さない。やっぱり、甘やかしすぎるのは、駄目でしょう？」
ラティエルは馬の背をなでた。

「どうして、助けてくれるんですか」
ウィリアムが聞くと、ラティエルは馬にくくりつけられた荷物から、一通の手紙を取り出した。
「筆無精の子供から手紙が来たら、何かしてあげたくなったのよ。多分、殿下も協力してくれるでしょうし」
「……殿下？」
ラティエルは手紙をひらひらと降ってから、荷物の中につっこんだ。何かをたくらむような笑みを浮かべた顔で、ウィリアムを見る。
「後でわかるわ。未来はわからないからこそ、楽しいのよ」

「この街って、公共浴場はないんですか？」
舞踏会に行く前に、ゆっくり湯船につかりたい、と思ったウィリアムは尋ねてみた。
風呂好きなステノブルクでは城にも大きな浴場があったが、マーヴェル人はバスタブ以上のものを用意しないと聞いたからだ。どうせなら、バスタブなんぞではなく大きな湯船に入りたいと思っただけだったのだが……。
「まぁ、信じられない。あんないかがわしいところに？」
ラティエルは呆れたような顔をした。
「アイリーン、いいえ、ステノブルクではどうだったか知らないけれど、この国の公共浴場は混浴なのよ。風紀が乱れるから、早く取り壊してしまうべきね」
一瞬遅れてその意味に気付いたウィリアムは納得した。
「安心なさい。私もお風呂は好きですから、邸に大浴場があります。……そういうことがしたいなら、無理に止めようとは思わないけれど」
ウィリアムは、ぎこちない笑みを浮かべながら、首を横に振った。

３４．エヴァ・ラトゥーサ（後書き）

やっとラティエルさんを出せました。この人の若い頃を想像するのがやたら楽しくて困ります。

お風呂は、昔読んだ本の名残です。トイレは整備していないと嫌ですが、お風呂があると香水っていらないような気がしてしまいます（偏見？）。でも、温泉は流行っていた筈（貴族限定で）なので、風呂嫌いでもなさそうなんですが。

35．舞踏会

豪奢な衣装を着せられ、無駄に飾り付けられ、ウィリアムはぐったりした。そんなようすには構わず、ラティエルは満足げに頷いた。
「やっぱり、金髪は映えるわねぇ」
でも、毛先が荒れてる……とか言いながら、侍女にハサミを持ってこさせ、勝手に切っていく。
「あの」
「あぁ、大丈夫よ。毛先を切るだけだから。ここまで伸ばすのは大変ですものね」
ほほほ、と上機嫌なラティエルに、ウィリアムは寒気を覚えた。
「いえ、勝手に伸びただけなのでそれはいいのですが」
「え？　あぁ、私の子供は皆金髪じゃなくって、つまらな」
「そうじゃなくって」
何で話を聞いてくれないんだろう。ウィリアムは心の中でつぶやいた。
「あら、じゃあ、何かしら。他の色の方が好み？」
「違います。あの、お……私は従者なんですよね？　こういう格好だと、目立つ気がするんですけど」
ラティエルは言われて初めて気が付いた、というように目をぱちくりさせた。
「まぁ、大丈夫でしょう。派手好きな方も多いものね」
何処か安っぽい笑みを浮かべ、ラティエルはウィリアムを手招きした。

肩が凝るだけの豪奢な衣装のまま、ウィリアムは舞踏会の行われる広間に足を踏み入れた。

着飾った男女がうようよいた。しかし、ドレスの広がりが半端ない。あれでまともに動けるのだから奇妙な話である。絢爛豪華な宮殿で、居場所を見つけるのはとても困難なような気がした。……こんなことなら、こういう場にも嫌がらず出ていれば良かったのかもしれない。

「踊れるかな……」

ウィリアムがこそっとつぶやいた言葉を聞きつけて、ラティエルは口の端だけで笑った。

「さて、そろそろ皇族方がいらっしゃるわね」

その言葉通り、階段を優雅に下りてくる人影があった。そして、ウィリアムはすぐにそのうちの一つに釘付けになった。

「アマーリエ……」

良くできた人形のように美しい顔を微動だにさせず、無駄のない動作で歩いていく。なんだか、とても遠い世界の人間のように感じられた。

やがて、音楽が始まった。ゆったりとした音楽に合わせて、人々も動き出す。

「付いていらっしゃい」

ラティエルに声を掛けられて、ウィリアムは頷いた。

「どこへ行くんですか」

「リオン殿下の所よ。お姫様は今日の主役だものね」

そうやって引き合わされた相手は、熱のこもらない目でウィリアムを見てきた。

真白の髪に淡紅色の瞳。どのような色を纏うことも拒否したかのような、病的に白い肌。耳飾りなどの宝飾を除けば、服も白だ。顔立ちは女皇に似ていて繊細だった。

「本の虫だと伺いましたが、実物（アルビノ）をご覧になるのは初めてですか」

落ち着いた声音で話しかけられ、ウィリアムは自分が不躾に彼を観察していたことに気付き、ドキリとした。
「え、あ、済みません。私のことを知っていらっしゃるのですか」
「一応は。貴方も顔は兎も角、他の情報はご存じでしょうし、自己紹介などは要りませんね。それに……貴方は姉の言っていた通りの人物のようですしね」
「は？」
ウィリアムが首をかしげていると、リオンは唐突に話を変えた。少なくとも、ウィリアムはそう感じた。
「このピアスは姉とおそろいなのですよ」
だから、一体何なのだろうか。
「ですから、これを媒体にして姉と会話することができるのです」
「ええと……？」
「しかし、姉が帰ってきてからというもの、話ができなくなりました。また、貴方のことを覚えていないようです。つまり姉は今、記憶を封じられている状態です」
一切表情を変えずに、リオンは淡々と言った。端正な顔から表情が抜けていると、ちょっと怖い。間違いなく、怒ると怖いタイプだろうとウィリアムは思った。
「それって、魔術ですか」
「そうです」
ウィリアムの少しずれているような気のする質問の後、沈黙が訪れた。
「で、普段、アマーリエはどこにいるのかわかるかい」
ある意味居心地のいい沈黙を破ったのはラティエルだった。ウィリアムはここへ来た目的を思い出し、リオンは小さく頷いた。
「しかし、それをお聞きになって、どうするおつもりですか」
リオンは眩しそうに目を細めながらラティエルを見た。ラティエルの背後には丁度照明があったのだ。ラティエルはウィリアムをちらりと見てから、口を開いた。

「アマーリエをこの国から連れ出すんだよ」

３５．舞踏会（後書き）

変なところで切れているのは長いからです。続きは、できる限り早く書こうと思います。

でも、どこまで深入りしようか迷います。さらっと終わらせた方が綺麗にまとまるんでしょうが。

36．そして

リオンは小さく眉をしかめて見せた。
「姉は、彼のことを覚えていないのですよ。連れ出して、どうするのです」
微かにだが、声に感情が混じっているような気がした。
「どうするって……」
ウィリアムはどうするのだろう、と思った。アマーリエを連れ帰って、そこまでしか考えてはいなかった。
「さてね。だが、記憶を戻すのは殿下の仕事でしょう」
ラティエルが面白そうに言った。
「でも、あの記憶は、忘れていた方が幸せだったのではないのですか。……その、思い出すきっかけを与えたのは、彼なんでしょう……？　本当に、大丈夫なんですか」
何が、どう、大丈夫なのか。リオンは口にしなかったが、ラティエルはわかったようだった。
「私にわかるはず、ないでしょう。しかし、アマーリエがここに戻ってきたのは、過去を乗り越える為なのではないのかしら。嫌なら、南へ帰ることもできたのよ。そうする権利が、アマーリエにはあるのだから」
リオンはラティエルとウィリアムの顔を交互に見た。そして、小さく目をそらした。
「協力はしましょう。でも、記憶をどうにかすることは、私には無理です。それでもよろしければ」
声は小さいが、はっきりとした口調で紡がれた言葉は、しっかりとウィリアムの耳に入った。そして、その声から感情が消えていることに気が付いた。しかし、その分、瞳が雄弁に語っていた。
姉（アマーリエ）を、傷つけないで欲しい。
そんなことを、言われたような気がした。

「その、アマーリエの記憶を封じたのは、魔術ではない、と？」
敢えてそこには触れずに、ウィリアムは違うことを聞いた。リオンが魔術を使えるのはわかる。なのに、それでもアマーリエの記憶を取り戻すことができないと言うことは、アマーリエにかけられた魔術がよほど強いか、魔術以外の何かだからだろう、と思ったのだ。そもそも、女皇は魔力を持たないし、魔術も嫌っているはずなのだし。
案の定、リオンはためらうようなそぶりを見せつつも、頷いた。
「そうです。しかし、それについてここで話すことはできません」
それから、周囲を見回す。
「どうぞ、こちらへ。ラティエル様はどうなさいますか」
「私はそんなもの、知りたくもない。ここにいますわ」
リオンはそれを聞いてから、ウィリアムに手招きした。ウィリアムはラティエルをちらりと見てから、リオンの後に付いていった。
しかし、どうして大国の皇太子の行動に注意を払わないのだろう。先代あたりから皇王が妙なことを言い出して、力を失ってきているとはいえ、マーヴェル皇国はこの大陸で一番力があるのに。
「人々の関心をそらす魔術です。目立つと困りますから」
前方から淡々とした声がして、一瞬、心が読まれたんじゃないか、と思った。
しかし、この皇子は、いつもこの手の魔術を使っているのでは無かろうか。精一杯、人の目に付かないように生きているように見える。
華やかな大広間から出る間際に振り返ると、アマーリエの姿が見えた。
作り物の感情が張り付いた、人形のような皇女は左腕に、血よりも鮮やかな赤いリボンを巻き付けていた。それは、普通のリボンのように振る舞っていたが、持ち主の動きにあっていなかった。そう、アマーリエであってアマーリエではない、ただのお人形。
「いくら見たって、無駄です」

冷ややかな声に、ウィリアムは従った。そして、何処か薄暗い廊下に足を踏み出した。

36．そして（後書き）

サブタイトルは今回も機能しておりません。誰も気にしてないんですよね？　私はサブタイトルを見ない人間なので、いまいちわかりません。

それはともかく、今年も終わるようです。例年通り、ろくに勉強もせず、他の受験生の皆様に呆れられるような生活をしてしまいました。

来年はまともな年になりますように。

37．禁術

リオンは何喰わぬ顔で警備の兵士達の横を通り抜けた。
どんな魔法……いや、魔術を使っているにしても、さすがにこれは気付かれるだろう。と思いながらウィリアムはリオンについて行った。
兵士達はすました顔で突っ立っている。外からの侵入者には警戒しても、中から出る人間には注意を払っていない、ということなのかもしれない。
「で、どこへ行くんですか」
兵士達が見えなくなってからウィリアムが話しかけると、リオンはちらりとこちらに視線をやった。しかし、すぐに顔を前に向け、立ち止まった。彼のすぐ近くには優美なデザインの噴水がある。夜光石の類で照らしているらしく、水がきらきらと光っている。
「別にここでも構いませんが」
「え？」
確かに人気はなかったが、外で話をすると、どこで聞かれているかわからない。むしろ、あの場所で話した方が、人の声に紛れて良いような気がした。
「……部屋の中の方が、よほど危険だと思いますけど。それに、今から話すことは、たとえ造りものでも自然がある方がいいんです。余計な誤解はされたくありませんから」
リオンが噴水の縁に腰掛けながら言った。
「誤解？　誰にですか」
「精霊達にです。精霊に疑われることは、魔術師にとって致命的なんだそうです」
何処か遠い目をしながら語るリオンは、言ったことを信じているようには見えなかった。ただ、言われたことに従っているだけ、という印象がする。

「では、本題に戻りましょう。……母が使っているのは、禁術と言われるものです。あなたにも、知識があるなら使えます。逆に、それを私が扱うことはできません」
ウィリアムは一瞬何のことかよくわからなかった。しかし、女皇と自分の共通点は一つだけだということに、気が付いた。
「つまり、その禁術とやらは、魔力があると使えない？」
リオンは小さく頷いた。
「西の大陸で使われていた法術と魔術に対抗するという意味で近いものです。でも、両者は別物です。法術は魔術を無効化する為のものでしたが、禁術は命を魔力の代わりに使います。……もちろん、魔力だって生命力の一部ですし、対価として自分の命を差し出すのは個人の勝手ですから、それだけなら禁術なんて呼ばれる必要はないんです」
季節はずれの、冷たい風が吹いて、なま暖かい空気を吹き飛ばした。
「精霊が怒っていますから、手短に話しましょう。禁術の別名は生贄の秘術です。つまり、他者の命ですね。母は、姉の命を使ったようです。……あの程度の術なら、数ヶ月寿命が縮むくらいで済むそうですが」
リオンはウィリアムの顔を見た。
「禁術を解けるのは、魔力を持たない人間か、魔法の扱える人間だけです。あなたが禁術（あんなもの）を習得する必要はありません。あなたが本当に、姉に戻ってきて欲しいと願うならば」
「それだけ、ですか」
「そうです。他の方法は、大昔に禁術に関する書物を燃やした時に、喪われました。魔術を倦厭する動きが出る前には、禁術は廃絶されました」
大昔……とつぶやいて、ウィリアムはおかしい、と思った。
「どうして、そんなものを女皇が知っているんです？」
リオンは、少しだけ顔を背けた。

「あなたの母君が、教えたんでしょう。アイリーン王家は、奴隷制度を維持し続けることで、秘密裏に禁術を行っていました。アイリーン王家の生き残りである彼女は、最後に禁を犯したのです。……そもそも、オーウェン王にアイリーンを攻撃させたのは、禁術を廃絶する為です」
「攻撃させたって、どうして。しかも、アイリーンの領土をマーヴェルに組み込まずに？」
ウィリアムがたたみ掛けるように言うと、リオンは口元に小さな笑みを浮かべた。
「マーヴェルは私の代で終わらせます。これは、先皇からの計画です。しかし、マーヴェルの民が、アイリーンの遊びの道具にされるのは困りますし、奴隷制度を復活させるわけにはいきません。ですから、それらの原因であるアイリーンは消されたのです。……この国の領土に組み込まなかった理由は、秘密です。まだ、それを知るべき時ではありません」
「それって」
「今は、そんな昔の話をするべきではありません。……姉が普段、どこに閉じこめられているのか、教えます。ラティエル様に言われたので、できる限りの協力はするつもりですが、結局、あなた次第です。失敗しても、責任はとれませんから」

37．禁術（後書き）

要らないかな、と思いつつ書いてみました。
新年なのに、胃腸に来る熱風邪を引いてしまい、勉強できなくて不安でいっぱいです。センターが……。
次回、というか、アマーリエはセンター試験が終わるまで出てこないでしょう。下手すると、前期試験が終わるまで、かもしれません。後期試験は小論文とかなので、対策のしようもないし、書いてるかもしれません。
お目汚し、失礼しました。

38．空白

一体、何をしていたのかしら……？

アマーリエは窓の外を見ながら、そう思った。
昨日、母親と話した記憶はある。でも、その内容が思い出せない。
数年ぶりにあった母親は、変わっていなかった。
……数年ぶり？　城外にさえ、出たことがないのに。
一体、どういうこと？

朝起きてから部屋の中を見回すと、家具の配置が記憶と少し違うことに気付いた。
部屋の隅には、きれいに畳まれた服と、妙な杖が置いてあった。服を広げてみると、それは庶民が着るようなワンピースだった。身体に当ててみるまでもなく、裾が短いのがよくわかる。膝が辛うじて隠れるくらいだろうか。
「庶民でも、もっと丈の長いドレスを着るわ。なんてはしたないのかしら」
そう口に出してから、違和感があることに気が付いた。
……はしたない？　いいえ、違うわ。でも、こんな服、一体何時着たというの？
杖を持ってみると、背丈ほどの長さがあったそれは、一瞬にして縮んだ。ちょうどバトントワラーのバトンくらいの長さになってしまったそれを見て、アマーリエは首をかしげた。
「妙に手になじむのだけれど……これ、何かしら。まるで、魔法使

いのようだけれど……」
杖を持って呆然としていると、ドアがノックされた。
「失礼致します、姫様」
返事もしていないのに入ってきたのは、見知らぬ女性だった。女官の服を着ているから、そうなのだろうけれど。……小さい頃から多くの女官に囲まれてはいたが、顔くらいは覚えている。それなのに、全く覚えがないなんて。
「ローズ、ローゼリアはどうしたの？」
いつも朝起こしに来てくれる親友の名を出すと、女官は小さく首をかしげた。
「ローゼリア様は、ご結婚なさいました。今は、ステノブルクにいらっしゃいます」
アマーリエは眼を瞬かせた。ステノブルク？　南の国境線を接している、新興国のことだろうか。確かあそこには紫色の変な草があって、自分を精霊呼ばわりした少年が……。
その途端、ズキりと頭が痛んだ。とっさに手で頭を押さえると、女官が心配そうに見てきた。
「どうなさいました、姫様」
声が、遠くに聞こえた。

そして、今に至る。
アマーリエは重いため息をついた。
あれこれ考えてみて、数年分の記憶がないことはわかった。けれど、それ以上のことがどうしても思い出せない。医者は、よくある忘れ病です、と言っていたけれど、自分の身にそれが起こったとはどうしても思えなかった。
「それに、なんだか、視線が冷たいのよね……」
表面上は同じなのだが、向けられる視線が、幼い頃とは微妙に違

う。
記憶がないから、よそよそしく感じられるのだろうか。
もう一度、ため息をつこうとした時、ドアが叩かれた。返事をすると同時に、姿勢を正す。
なんだかよくわからないが、姫らしく振る舞わねばならないのだから。

「今日は、舞踏会です」
ですから、と大勢の侍女達が部屋の中へ入ってきた。そして、大きな鏡のある部屋に連れてこられ、衣装を取っ替え引っ替えされた。苦しいほどに締め付けられたコルセットの上から着せられたドレスは、確かに美しかったが。
「さすがにきついわ。緩められないの？」
「できますが、こちらの方が美しく見えますから。それに、今日は姫様の旦那様を決めるために行われるそうです」
……ダンナサマ、というと、えぇと。でも、年齢的には確かにそういうお年頃なわけで。二十歳までにお嫁に行くのは皇女として当然で……。
「ちょ、ちょっと待ってくれない？　私、記憶喪失なんでしょう？」
そんな状態で結婚はさすがに……。
「そうですが、陛下のお決めになったことですから」
冷たく返され、アマーリエが焦っている間に侍女達は仕事を終えたらしい。鏡に映った自分は、確かに姫君らしかった。が、それに自己陶酔するような余裕はない。
侍女達が道を空けるのが鏡に映って見え、振り返ると、女皇がいた。
「お母様……」
女皇は悠然とアマーリエに歩き寄ると、その額に口づけを落とし

た。
「あぁ、なんてかわいいのかしら」
そう言われた瞬間、何故か、背筋に悪寒が走った。小さい頃から、何時もやられていたことの筈なのに、どうして。
「お母様、私の結婚相手を探すとは、どういうことなのでしょう」
戸惑いつつも、そう口に出すと、女皇は笑った。
「そんなの、当然に決まっているじゃないの、アマリー」
悪い子ね。
最後は周囲に聞こえないように小声で。その途端、アマーリエは身体の自由が利かなくなったことを知った。笑いたくもないのに、顔が勝手に笑っている。
「そうでしたわね、お母様」
そんなことを言いながら、差し出された母親の手にすがる。
訳がわからない。私は、そんなこと、したくなんてないのに。
泣きたかった。けれど、顔には嬉しそうな笑顔が浮かんでいた。
それは一体、誰？

38．空白（後書き）

センター試験も学校の授業も終わりました。後は卒業式だけ……なんですが、複雑な気分です。８割しかとれなかったのはともかくとして、妙な虚脱状態に。本番は二次試験なのにね。

ということで、記憶喪失アマーリエです。お姫様救出作戦（？）なんて書ける状態じゃないので。

アマーリエの言葉遣いその他は、元に戻った、と解釈してください。あと、最後の方は女皇に操られてます。わかりにくかったり、おかしいところがあったらごめんなさい。

そういえれば、人物紹介ってするべきなんでしょうか。もう話の結末なんて予想できそうなので、ネタバレにはならないと思うんですけど。

39．探求

「で、アマーリエは本当にここにいるんですか？」
ウィリアムが振り返ると、リオンは小さく頷いた。
「普段は。今はもちろん大広間でしょうけど」
「ということは、また忍び込まなきゃいけないという？」
「そうなりますね。でも、ここの警備って、案外穴が多いんですよ」
リオンが微かに浮かべた悪戯をする子供のような笑みに、ウィリアムは固まった。
大人しそうな顔をしておきながら、意外に……。
「まぁ、そのあたりは僕に任せてください。僕の従者ということにでもすれば、大概の所には入れるようになります。でも、問題は、その後です……」
リオンはそっと建物を見上げた。それは、何の変哲もない塔に見えた。窓からのぞき見た限りでは、なかなか快適そうな内装だ。外にも、警備らしきものの影は見あたらない。
何が問題なんだ？　と首をかしげたウィリアムに、リオンは続けた。
「物理的な問題じゃありません。ここには、先ほど話した禁術が、隅々まで行き届いているんです。僕が入れないのはもちろん、ここまで濃いと、あなたにも影響が出るでしょう」
「……つまり、魔力のない人間にまで作用するんだな。ということは、アマーリエは」
ウィリアムが焦った声音で問いかけると、リオンは小さく首をふった。
「姉は、禁術を掛けられていますから、大丈夫です。もし、作用するならば、姉もこの中に入ることはできなかったでしょうし」
言われてみれば、その通りだった。アマーリエは魔術師なのだ。魔力を持たない者にまで影響が出るならば、魔力のあるアマーリエ

には、そのままでは耐えることができないだろう。それなのに、彼女の体調が極端に悪くなったとか、そういうことがないということは、彼女には禁術による影響がないということでもある。
そこまで考えてから、不意に、舞踏会は抜けたままで良いのだろうか、と思った。自分はともかく、世継ぎの皇子がこれではまずいような気がする。
「そろそろ戻った方がよさそうかな……」
ウィリアムの考えを読んだのか、読まなかったのか、リオンがそうつぶやいた。

「ところで、何か魔術でも使っているんですか？」
大広間に戻る途中、ウィリアムはずっと気になっていたことを聞いてみることにした。
どんな魔術を使っていても、訓練された兵士の脇を通っていくのではばれてしまうだろう。なのに、一度も怪しまれたことがない。魔力なしの自分ですら気付くのだから、魔術ではないのだろう、そう思っていたのだ。
「別に、魔術なんて使っていませんよ。これは単なる暗示です。気になるのなら、教えましょうか？　魔術ではないので、魔力がなくてもできますけど」
前を歩くリオンは、気軽に後ろを振り向いて言った。彼の白い髪が、月光を受けてきらきらと輝いた。……魔術でも使わないと、夜闇の中にとけ込むのも無理だろう。
「暗示？　そんなもので……？」
いぶかしげに聞き返すと、リオンは小さく肩をすくめた。
「よく馬鹿にする人はいますけど、ある意味、魔術よりも便利ですよ。あなたも知っているでしょうけれど、魔術は気配を持っていますから、気付かれやすい。そもそも、人間の感覚なんて、隙が多い

ものですよ。そして、その隙につけ込む方が、魔術よりも簡単だとは思いませんか？」

「……」

「別に、わかってもらおうとは思いませんけど」

39．探求（後書き）

随分日が開きました。ごめんなさい。
しかし、話がおかしな方向へ進んでいるような気がするのは何故なんでしょうか。
半分浪人決定で、何かが吹っ切れたような気がします。ということで、ハッピーエンドを目指して。

40．バラ園

とりあえずリオン皇子の従者になったウィリアムには、皇城を歩き回る許可が下った。もちろん、入れない場所もあるが、重要なものはそれではない、と思う。

アマーリエの閉じ込められた塔は、巨大な庭園に面している。その庭園は建前上、皇族専用で、気軽に入れる場所ではなかった。しかし、立ち入りを禁止された場所ではない上、別にそこにいるのが発見されたとしても、そう不自然でもない。実質、夜であれば自由に立ち入れる場所だ。

「バラで迷路を作ろうなんて、誰が考えたんだろ」

ぼそりとつぶやいたウィリアムは、迷っていた。

「道楽にしては、凝り過ぎだ……」

“バラ園”とはいっても、そこに植えられているのはバラだけではない。様々な種類の花々を植えることによって、季節に関係なく、巨大な迷路が作られているのだ。

園芸技術が無駄に発展したが故の悲劇だ、とウィリアムは内心ぼやいた。

「Ｂｏｎｓｏｉｒ　ｍｏｎｓｉｅｕｒ．Ｃｏｍｍｅｎｔ　ａｌｌｅｚ－ｖｏｕｓ？」

背後からの声に、はっとする。そして、何と返せばよいのか、迷った。

青銀色の髪に、深い青の瞳。この人は……。

「ハロルド・ローツェル……」

生ぬるい風が、二人の間を駆け抜けていった。

「久しいね、ウィリアム君。娘に掛けた魔法を解いたのは、君だね？」

ドキリ、とした。首筋にナイフを当てられているかのような冷たさを感じる。

「別に責めているわけじゃない。ただ、父親としては、確かめておくべきだからね」
黙ったままのウィリアムをちらりと見てから、ハロルドは小さく笑った。
「まぁ、いいよ。君は無理強いしそうなタイプでもないし。そうだね。君にチャンスをあげてもいいよ。もとはと言えば、私が悪いのだから」
「へ？」
「簡単なことだ。私は明日の夜、女皇に会うつもりだ。彼女はそんなに器用な人間じゃないから、きっと結界が緩むだろう。……彼女は、やり方は知っていても、きちんと魔術を学んだわけではないのだから」
「でも、あれは魔術ではないと……殿下が」
「もちろん、そうさ。でもね、どんな術でも、結局は同じなんだ。細かい手順を挙げだせばきりがないけれど、目指しているものは一緒だ。要は、基本原理を理解せずに、応用問題を突然解くことなんてできない、ということでね」
何の事だか、よくわからなかった。けれど、言いたいことは何となくわかるような気がする。
「君には魔力が全くないからわからないかもしれないけど、魔力だろうが、生命力だろうが、やっていることは同じなんだ。ちょうど、魔術と魔法の境界があやふやなように、それらの間にも大した差なんてない。大雑把にくくってしまうなら、異能だって、人が生きることだって、そうなんだ。なのに、彼女はそれを認識しようとはしなかった。結果、彼女はいまだにあの術を使いこなせてはいないんだ」
「そんなことを、どうして……」
「わかるんだよ。私は、フリーデルトの性格をよく知っているから。けれど、そんな術だから、かなり危険だ。無くてもいいリスクまで負っている。ひょっとしたら、アマーリエの記憶は全て、消え去っ

てしまっているのかもしれない」
ウィリアムははっと息をのんだ。
月影を背負ったハロルドは、ほほ笑むと、ウィリアムの肩を叩いた。
「Ａ　ｄｅｍａｉｎ．気をつけるんだよ」
そのまま通り過ぎようとしたハロルドに、ウィリアムは声をかけた。
「ちなみに、それは何語ですか？」
「さぁ。昔、ステノブルクというちいさな街を中心にした、都市国家があったんだ。ちょうど、天人が降りてくるあたりの時期に。その時、その国に与えられた言葉だよ。一時期は、この国でも広まっていたのだけれど、さすがの君も知らなかったね」
さぁっと風が吹いて、ハロルドの姿は曲がり角に消えた。
「道を、聞けばよかった……」
ふと、塔を見上げると、銀の光がきらりと見えたような気がした。

４０．バラ園（後書き）

不思議なことに大学生になった祥鈴です。突然一人暮らしが決まったり、ネットがつながらなかったり、入ってみた部活が案外辛かったり、テストで一桁の点数だったり、いろいろなことが……。

間があきすぎてすみません。しかし、前期試験もかなりやばいです。どうしよう？

41・記憶

「暑いわ」
つぶやくと、側にいた女官が慌てて扇を持ってきた。
「そんなもの」
アマーリエはそんな女官を無視して、立ち上がった。窓を押し開くと、夜風が部屋の中に滑り込んできた。
眼下には無駄に広い、迷路が広がっている。上から見なければ、その真の美しさには触れられないだろう。なんたって、中に入ったら迷うだけだからだ。
「姫様。ラツィエル様がいらっしゃいました。いかがなさいます？」
色々と思い出して苛々しだしたアマーリエに、別の女官がそう、声を掛けてきた。
アマーリエは目を見開いた。
「ラティエル様には、お会いしていいのかしら」
母は、自分をここに閉じこめておきたいらしかった。誰との面会も許可せず、いや、許可しても操られた状態だった。
「ラツィエル様が、陛下に話を通されたそうです。姫様がお会いになりたくないのでなければ、と」
「いいえ。もちろん、お会いしますわ」
母でも女官でも無い人と、まともに話すのは久しぶりだった。

「お久しぶりですわ。ラティエル様」
アマーリエがドレスを着替えて出ていくと、ラティエルはにこりと笑った。
「本当に、久しぶりね。それにしても、貴女にそう呼ばれるなんて珍しいこともあるものね」
楽しそうなラティエルの様子に、アマーリエは戸惑った。

ラティエル様は、ラティエル様じゃ、ないのかしら……。呼び方なんて、変えたことないのに。
「珍しいって、私、ずっとラティエル様とお呼びしてましたけど？」
「そうだったかしら……貴女、あの時から私のことをラツィエルと呼ぶようになっていたでしょう？」
「あの、時……？」
何のことだか、わからない。何故か、胸がざわついた。
「覚えていないのね、やっぱり……」
どこか残念そうな様子のラティエルから、アマーリエは一歩後ずさった。
心臓が妙な鼓動を打った。嫌な予感がする。
思い出したいのに、思い出したくない……。
「え？」
自分の声なのに、どこか遠い。
「私、一体、何を忘れたの……？」
頭が割れるように痛い。何か、大切なものを、置き忘れているような。

荒い息をついて座り込んだアマーリエを、ラティエルは抱きしめた。
ウィリアムの事どころか、数年分の記憶を一気に消されたのね……。あの時の前までの記憶しかないみたい。
「ねぇ、アマーリエ。貴女、ハロルドとステノブルクに行った時のことを覚えてる？」
アマーリエはぽかんとした表情をした。が、やがてぽつりとつぶやいた。
「紫の草が、たくさんあったわ」
紫、紫の草って、何のこと……いえ、でも、あれも確かに紫の…

…。
「えっと、それは、シムシムのことかしらね？」
アマーリエが小さく頷くので、ラティエルはほっとした。
一応、小さい頃の記憶は残っているらしい。
「じゃあ、“月の精霊”は覚えているのかしら？」
「金髪の男の子が、私のことをそう呼んだわ。でも、そんなものいるわけが無いのに」
ラティエルはその返事に、違和感を感じた。それは、つまり……。
「精霊の存在を信じてないのね」
「当然だわ。そんなもの、いるはずがないもの」
アマーリエの迷いのない答えに、ラティエルはため息をつきたくなった。
彼女が忘れているのは、魔術だ。
よく考えてみれば、当然のことだった。女皇は、ウィリアムとの関係を知らないのだから。
「ねぇ。武術大会のことは覚えているかしら。ほら、確か、授賞式に」
アマーリエはそこまで聞いて、にこりと笑った。
「優勝者が逃げ出した、剣術部門のこと？」
「そうよ。貴女は結局、二位の人に栄冠を授けたでしょう？」
えぇ、と頷こうとしたアマーリエは、しかし、動きを止めた。
「私はあの時、あの時……栄冠を、誰に授けたのかしら」
その不安げな声に、ラティエルは首をかしげた。
「貴女は、ステノブルクの第二王子に栄冠を授けたのよ？」
「ウィリアム・ドゥオ・ステノブルク？　本の虫に剣が扱えるの？」
小馬鹿にしたようなもの言い。確かに、伝えられているイメージでは、剣術大会の初戦で負けそうではある。が、あの日、アマーリエは初戦で彼を見てから、ずっと彼に賭けていた。決勝戦でウィリアムが負けなければ、アマーリエの一人勝ちだったはず。
「どうしよう。顔が、思い出せないわ……彼だけを、思い出せない

？」
アマーリエは眉をギュッとしかめた。
「アマーリエ？」
「ちょっと、夜風にあたってくるわ。いいかしら？」
「え？　えぇ」
ラティエルは困惑しながら頷いた。どうやら、魔術だけ、というわけでもなさそうだ。

42．追憶

窓の外、そこには、相変わらずのバラ園があって――――。

「え？」

その中央付近。なぜか、金の光が見えたような気がした。よく見直そうとしたときには、消えていて。

目をこすっても、何も見えない。気のせいなのか、そうでないのか。わからない。ただ、その出来事は、とある記憶を引きずりだした。

『月の、精霊？』

あの日の少年の姿。あの子は、誰？

『セイレイ？　あなた、魔力なんてないでしょ？　見えるわけないわ』

マリョク……精霊以上にファンタジーじゃない。何でそんな単語が？

そう思ったとき、また違う場所にいた。

『魔法使いと魔術師の違いがわかるかい？』

『ちがい？』

『そう、違いだ。精霊と、妖精。彼らはそれぞれ別のものだ。私のように妖精と話せるもののことを、魔法使いと呼ぶんだよ』

そう言って抱き上げたのは、……お父様？　どうして、忘れていたのかしら。

『まじゅつし、は？』

『アマーリエみたいに、精霊としかお話できない人のこと。でも、妖精とは違って、精霊には力を貸してもらいやすい。仲良くしておきなさい。きっと助けてくれるよ』

そしてまた、世界は暗転する。

なぜか杖をもっていた。しかし、それはあっというまに小さなバトンになった。

『精霊と対話するための道具、それが杖です。とはいえ、“杖”とは総称に過ぎません。古くは、水には杯を、火には杖を、土には円盤を、風には剣を用いるのがよいとされていました。しかし、杖に形の制約はありません。杖とはただの魔力の増幅器に過ぎず』

手になじんだバトンが目に入る。それが、すっと剣に変わった。

『私と手合わせしなさい。風の魔術師さん。剣は扱えるのかしら？』

『ついに六宮士官よね。おめでとう、アマリー』

目まぐるしく変わる風景。

これは一体、誰の記憶？

「アマーリエ、どうしたの？　大丈夫？」

肩をゆすられて、はっとした。

「え……私、どうして？」

いつの間にか、本当にあのバトンを握りしめていた。

その腕を何気なく持ち上げると、左の袖口から、真紅のリボンが覗いていた。

――どうして私、今までこれを、不思議に思わなかったの？――

それは、明らかに普通のリボンではなかった。少なくとも、重力の法則は無視している。そして、結び目も見当たらないのに、左腕にしっかりと巻きついていた。素材は柔らかく、風に簡単になびくのだろうが、それでも、腕を這い上がってくるような動作を、普通のリボンはしないものだ。

リボンはゆらゆら揺れてから、バトンに巻きつき、右手からバトンを取り上げた。それはまるで、杖をふるうかのように動き、バトンは淡い光を纏った。穏やかな風が巻き上がり、アマーリエの髪を揺らす。

「なに、これ」

そうつぶやいたとき、背後から、どうして、という声がした。

後ろを振り向くと、心配そうなラティエルの顔の向こうに、母親の姿があった。
「どうして。ちゃんと封印したはずなのに。どうしてそれは、まだ動いているの」
うわ言の様にそうつぶやきながら、こちらに迫ってくる。何故か、とても怖かった。後ずさると、ラティエルが立ち上がった。
「いい加減にしなさい、フリーデルト。何度このようなことをしても無駄だと、言ったでしょう？　現実を見なさいと、何度言えば分かってくれるのかしら」
叱るような口調。ラティエルの瞳が、女皇（フリーデルト）の瞳とぶつかる。
「あなたに言われる筋合いはないわ。私の子供を、どう育てようと、私の勝手でしょう？　大体、あのような能力、無いほうが幸せに決まっているじゃないの」
我儘を言う子供のように、女皇は叫んだ。
どうしてだろう？　こんな光景を、前にも見たことがあるような気がする。そう、でも、あの時は、ラティエル様じゃなかった。お母様と言い合ったのは、お父様……。
『たとえ君が忘れてしまっても、精霊たちは必ず君のそばにいる。君のことを愛してくれている。だから、怯えるような真似だけはしないで。心を開けば、彼らはきっと君の願いに応えてくれる』

あぁ、そうだったわ。私は、魔術師だったのよ。そして、異能を持つもの。
どうして忘れていたのかしら。私には、母親を恐れる必要なんて、一つもなかったじゃない。南にだって、行けたじゃない。……仕事も、できたわ。何も、怖いものなんてなかった。
いいえ。私は一体何に、怯えていたの？

暖かい風がアマーリエの頬をなでた。
ふっと、記憶が蘇ってくる。とても、懐かしいような気がする。
「どうして私、こんなに忘れてたんだろう……」
つぶやくと、とても楽になったような気がした。

43．予感

ハロルドは不思議な気分で回廊を歩いていた。
数年ぶりに“帰って”来た“我が家”のはずなのに、見える風景が全く変わっていないことに、小さな落胆と、不気味さを感じる。
構造は、寒い地方の割には開放的で、陽の光を多く取り込めるようになっている。そのくせ、受け取る印象はとても閉塞的だ。かつて――水面下では今もだが――繰り広げられていた、権謀術数の陰湿な“世界”の名残を引きずっているのか。それとも、他国の文化を頑なに拒み続ける“お国柄”故か。何にせよ、この宮廷には、陰謀やら暗殺やらといった言葉がよく似合う。
角を曲がり、皇宮の奥へと進む彼を止める者はいない。
衛兵たちが数年間も音信不通だった女皇の夫の顔を覚えているわけではない。ただ、彼の姿が“見えなかった”だけだ。それは、彼の息子が愛用している魔術よりも強力な魔法。記憶の片隅にさえ、痕跡を残さない。
「にしても、本当に面倒な造りだな」
只人の眼にはきっと映らないであろう光景が、彼には視えている。それは幾重もの壁となって、彼の進行を妨げていた。
ここは、皇王の私室へつながる道……というか、私的な空間の一部だ。関連のないモノの侵入を防ぐため、様々な守護結界が施されている。今のハロルドは招かれざる者だ。だから、結界は彼の侵入を拒んでいる。――破るわけにはいかない。まだ、気づかれては――。

「どうして、なのかしら」
アマーリエは憂鬱さを隠そうともせず、つぶやいた。そのつぶやきに反応する者いない。ただ、そこに在るだけの女官たち。彼女ら

は、一体ナニを考えているのか。
「私だけ、外へは出られないのね」
結局、女皇はラツィエルには勝てなかったようで、何か言いたげな表情で去って行った。ラツィエルは、実は女皇には無断でやって来ていたらしい。その点についても、ラツィエルは微笑みひとつで女皇を黙らせて見せていた。
『アマリー。貴女、ウィリアム王子を覚えているかしら？』
ラツィエルは部屋を出る前にそう聞いてきた。
女皇はすでに去った後で、アマーリエが部屋の外へ出られないことが判明した後だ。
アマーリエはその問いに、一般的に知られていること以上のことを知っているか、という意図を感じた。だから、首を振った。
『いいえ』
それだけで伝わった。
『そうなのね。やはり、悪いのはあの子ね』
しみじみとつぶやかれた言葉に、アマーリエは首をかしげた。すると、ラツィエルは小さく笑った。
『フリーデルトのことじゃないの。まぁ、思い出さないほうがいい部分もあるのでしょうけれど』
アマーリエはただ、ラツィエルの顔を見ていた。何を指しているのか、全く分からない。
『でも、思い出したほうが、貴女のためにはなるでしょうね。……その能力（チカラ）を持った貴女には、ここで生きていくのは辛いでしょう？
南に行ってしまうのも、一つの方策（て）だけれど、いつまでも逃げているわけにはいかない。まぁ、ここから出られないのでは、仕方ないかしら』
その時のアマーリエには意味がよくわからなかった。思い出したほうが云々というより、なんだか気味が悪いのだ。どうしても、思い出したい、と感じてしまう。
「でも、本当に外には出られないし……」

ちらりと左腕に視線を向ける。そこには赤いリボンが絡みついていた。
「魔術も使えなくなったし」
そう。今のアマーリエには魔術が使えなくなっていた。
異能で動いているリボンを介して使う分には大丈夫なのだが、直に杖に触れると魔術が発動しない。杖なしで使えていたハズの魔術も使えないようだ。……なにより、少し動いただけでも体が重い。まるで、生命力を奪われているかのようで、気味が悪い。
「にしても、ラツィエル様、相変わらずだったなぁ」
この城でラツィエルの行動に文句をつけられるのは、女皇くらいのものだろう。
ラツィエルは辺境伯という地位はともかく、女皇が幼いころからよく面倒を見ていたらしい。ラツィエルの夫君が皇太子だった時期もあったらしいし、実際、フリーデルトが生まれたのをいいことに夫君が皇太子の位を返上しなければ、今頃皇太后と呼ばれていたはずだ。
まぁ、執政能力を無視すれば、王姉の息子よりも皇王の娘が位につくのはもっともなことだ。前皇……祖父は彼を皇位につけたがったらしいが、どちらも今は亡き人で、彼らの真意を知ることはできない。
「ラツィエルの夫君が皇位についてれば、この国も、もっとまともだったのでしょうけど」
そんなことを言いながら、窓から身を乗り出す。太陽が赤く燃えている反対側の空に、気の早い満月が浮かんでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0170f/

王子と魔女

2010年10月12日07時21分発行